

日本の禪院における中国的要素の摂取

——十境を中心として

1 はじめに

鎌倉時代末から室町時代にかけて、京五山・鎌倉五山をはじめとする禪宗寺院では、中国文化への憧憬・宗教的需要・修行環境の美化などの点から境致^①、とくに十境の選定が盛んに行われていた。早期の事例としては、渡来僧の明極楚俊（在日一三二九〜三六）の「題建長寺十境」（玄関・大徹堂・得月楼・逢春閣・拈華堂・蘸碧池・華嚴塔・嵩山・玲瓏岩・円通閣）、同じく渡来僧の清拙正澄（在日一三二六〜三九）の「東山十境」（慈観閣・望闕楼・大悟堂・群玉林・入定塔・楽神廟・無尽灯・清水山・第五橋・鴨川水）、夢窓疎石（一二七五〜一三五二）の「天龍寺十境」（普明閣・絶唱溪・靈庇廟・曹源池・拈華嶺・度月橋・三級岩・万松洞・竜門亭・亀頂塔）などが挙げられる。しかし、十境は日本の禪院に発生したのではなく、すでに南

宋・元時代の中国の五山において選ばれるようになっていたのである。入元僧の別源円旨（在元一三二〇〜三〇）の手になる『南遊集』に、「和雲外和尚天童十境韻^②」という偈頌が見える。

蔡 敦 達

萬松關

廿里蒼髯夾路遙、清風樹々響寒濤、
等閑掉臂那邊過、誰管門頭千尺高、

廿里の蒼髯 路を夾みて遙かなり、清風 樹々に寒濤を響かす、
等閑に臂を掉いて那邊過ぐ、誰か管せん 門頭千尺の高きを、

翠鎖亭

十二欄干凝碧寒、青山綠水四連環、
簷頭滴々零松露、孤鶴飛從天外還、

十二の欄干碧を凝らして寒く、青山緑水四もに連環す、
簷頭滴々として松露を零とし、孤鶴飛んで天外従り還る、

宿鷲亭

機自忘時心自閑、夢飛江海立欄干、向明月裏藏身去、莫與雪
花同色看、

機自ら忘るる時心自ら閑に、江海に飛ぶを夢みて欄干に立
つ、明月の裏に向いて身を藏し去り、雪花と色を同じうして看
る莫れ、

清關

山青雲白冷相依、是子歸來就父時、寒淡門風難入作、且從門
外見容儀、

山は青く雲は白くして冷やかに相依り、是れ子歸り來りて父
に就く時、寒淡の門風入りて作し難し、且く門外従り容儀を
見ん、

萬工池

鑿斷山根通宿雲、萬夫鑿下水泥分、池成月到鑑天象、不比黃
河徹底渾、

山根を鑿斷して宿雲を通じ、萬夫の鑿下りて水泥分つ、池成

り月到り天象を鑑し、黄河の徹底して渾れるに比せず、

登閣

一溪流水隔塵境、萬疊青山遶石房、不涉階梯超佛地、毘盧頂
上罵諸方、

一溪の流水塵境を隔て、萬疊の青山石房を遶る、階梯を涉
らず佛を超ゆるの地、毘盧頂上に諸方を罵る、

玲瓏岩

懸崖蒼壁太高生、不假天工雕琢成、突出八方無背面、四山花
木自枯榮、

懸崖の蒼壁ただ高く生じ、天工に假らず雕琢成る、八方に
突出して背面無く、四山の花木自ら枯榮す、

虎跑泉

菸菟爪下湧寒泉、一飲方知如蜜甘、多少禪和除渴病、休言衆
味不相兼、

菸菟の爪下寒泉湧き、一飲して方に知る蜜の如く甘きを、
多少の禪和渴病を除く、言うを休めよ衆味相兼ねずと、

龍潭

頭角淵潛水月交、清波徹底蘸青霄、有時沙界施甘澤、浩々業林長異苗、

頭角淵に潛みて 水月交り、清波徹底して青霄を蘸す、時有りて沙界に甘澤を施し、浩々たる業林に異苗を長す、

太白禪居

東晉沙門曾此禪、青山都是舊青氈、長庚星沒天河曉、童子不來經幾年、

東晉の沙門曾て此に禪し、青山は都て是れ舊青氈、長庚星沒す 天河の曉、童子來らず幾年をか經る、

天童寺は中国五山の第三位に列せられる大禪院であり、雲外和尚とは同寺四十九世住持の雲外雲岫（二二四二〜一三二四）のことを指す。その韻に和したもので、天童寺十境は雲外和尚によって選定されたものと考えてよからう。さらに、『扶桑五山記』³一に記載された天童寺境致には、五鳳樓・光明藏・九峰・龍潭・玲瓏岩・双沼・宿鸞亭・清閑・万松関・万工池・登閣・妙高台・翠鎖亭・門外二十里松・虎跑泉・太白禪居と、計十六ヵ所の境致名が挙げられている。すなわち、天童寺十境がすべて同寺の境致名に見えているのである。このように、十境の選定は南宋以降、五山をはじめとする中国の禪院で行われていたことがわかる。

以下、禪院の十境・八景選定にあてた「十詠」「十題」の詩・偈の影響や、「瀟湘八景」の影響、日本の禪院における十境の発達などの諸問題について、禅宗史・美術史・建築史の諸分野にわたる先達の研究成果を踏まえて総合的な考察を行いたい。

2 「十詠」「十題」の詩・偈と禪院の十境

前出の入元僧、別源円旨の「和雲外和尚天童十境韻」に現れた「天童十境」のほかにも、それより早く北宋時代に作られた舒亶の「天童十題」⁴が『乾道四明図経』卷八に見えている。

太白峰

千峰下視盡兒孫、僊事寥寥不可聞、長作人間三月雨、請看膚寸嶺頭雲、
千峰下視すれば盡く兒孫、僊事寥寥として聞くべからず、長えに作す 人間三月の雨、請う看よ 膚寸の嶺頭の雲、

太白庵

何年杖錫此徘徊、天上眞官爲我來、芝圃鶴歸香火冷、石基空鎖舊莓苔、
何れの年か錫に杖りて此に徘徊せば、天上の眞官 我が爲に來らん、芝圃 鶴は歸りて香火冷やかに、石基空しく鎖す 舊莓

苔、

玲瓏巖

詭形迴與萬山殊、空洞由來一物無、直恐虛心自天意、人間穿
鑿枉工夫、

詭形迴かに萬山と殊なり、空洞 由來一物も無し、直だ恐る
虛心は自ら天意にして、人間の穿鑿は枉工夫なるを、

響石

淵明休弄沒絃琴、混沌中含太古音、聞説幾回風雨夜、四山渾
作老龍吟、

淵明 弄するを休めよ 沒絃琴、混沌の中に太古の音を含む、
聞説く幾回の風雨の夜、四山渾て老龍の吟を作すと、

龍池

靈蹤聊寄數峰雲、雨意含雲白晝昏、不用高僧時呪鉢、一泓長
貯萬家村、

靈蹤 聊か寄す 數峰の雲、雨意 雲に含まれて白晝昏し、高
僧の時に鉢を呪するを用いず、一泓 長えに貯う 萬家の村、

虎跑泉

一嘯風從空谷生、直教平地作滄溟、靈山不與江心比、誰會茶
仙補水經、

一たび嘯けば風は空谷從り生じ、直ちに平地をして滄溟と作
らしむ、靈山 江心と比せざれば、誰か會せん 茶仙の水經を補
うを、

佛跡

蒼崕絕壁印苔痕、陳跡千年尙似新、杖履紛紛走南北、幾人不
是刻舟人、

蒼崕絕壁 苔痕を印し、陳跡千年 尙お新たなるに似たり、杖
履紛紛として南北に走るも、幾人か是れ刻舟の人ならざらん、

臨雲閣

高僧終日笑凭欄、亦似無心懶出山、幾度海風吹散雨、坐看彩
翠落人間、

高僧 終日 笑いて欄に凭り、亦た似たり 無心にして山を出
づるに懶きに、幾度か海風吹きて雨を散じ、坐して看る 彩翠
の人間に落つるを、

春樂軒

隔水巖花紅淺深、花邊相對語幽禽、管絃不到山間耳、誰會凭

欄此日心、

水を隔つる巖花紅は淺深、花邊に相對して幽禽に語る、管絃は到らず山閒の耳、誰か會せん欄に凭る此の日の心、

宿鷺亭

雲過千溪月上時、雪蘆霜葦冷相依、正縁野性如僧癖、肯爲游魚下釣磯、

雲は千溪を過ぎて月上る時、雪蘆霜葦冷やかに相依る、正に野性の僧癖の如きに緣りて、肯て游魚の爲に釣磯に下る、

舒宣（一〇四二—一一〇四）は北宋末に生きた士大夫（文人官僚）

で、御史中丞までつとめたが、その後、罪を得て官をやめさせられた。没後、徽宗皇帝から竜図閣学士を贈られている。ここで注目したいのは「天童十題」のうち、太白庵（太白禅居）・玲瓏岩・竜池（竜潭）・虎跑泉・宿鷺亭の五つが「天童十境」と重なることである。文人・禅僧を問わず、同じ主題を詩・偈に書いたことは、直接ではなくても両者の間に交流のあったことが窺われる。事実、『乾道四明凶経』巻八を見る限り、「天童十題」のほかにも、舒宣は禅僧や禅院に関する詩あるいは文を数多く作っている。禅僧による禅院の十境選定は、こうして文人から影響を受け、また、かれらとの交流を通じて作り出されたものと思われる。

いっぽう、同じく北宋末に生きた高僧の覚範慧洪（一〇七一—

一二八）の著した『石門文字禅』巻八に「任价玉館東園十題^⑤」が収められている。十題とは涵月亭・覽秀亭・四可亭・第一軒・如春軒・寒亭・浩庵・方便堂・覚庵・鑿止軒で、文人の庭園あるいは別荘について、十の景物を選んで詩に詠んだものである。舒宣が天童寺の景物を、覚範慧洪が庭園の景物をそれぞれ十首の詩に作ったことは文人と禅僧との間の交流だけでなく、当時「十詠」「十題」といった形の詩が文人はもちろんのこと、禅僧の間にも広く作られていたことを窺わせる。また、北宋の高僧の契嵩（一〇〇七—七二）の著した『鐔津集』巻十二には「法雲十詠詩叙^⑥」があり、これは法雲上人の作詩した十詠のために書いた序文である。

法雲畫上人、繕其居之西廈、曰翠樾堂、以其得山林之美蔭也、戸其北垣、曰陟崖門、示其乘高必履正也、始其入林之徑、曰嘯月徑、高其所適也、疏其泉、曰夏涼泉、貴其濯熱也、表昔僧之瑩、曰華嚴塔、德其人也、指其嶺之峻絶者、曰樵歌嶺、樂野事也、名其亭、曰暎發亭、取王子敬山川相映發之謂也、目其山之谷、曰楊梅塢、別嘉果也、榜其閣、曰清隱閣、以其可以靜也、就竹關軒、曰脩竹軒、擬其操也、是十詠者、舉屬法雲精舍、法雲畫上人、其の居の西廈を繕いて、翠樾堂と曰う、其の山林の美蔭を得たるを以てなり、其の北垣に戸して、陟崖門と曰

う、其の高きに乗ずるに必ず正しきを履むを示すなり、其の入林の徑を始めて、嘯月徑と曰う、其の適く所を高くするなり、其の泉に疏して、夏涼泉と曰う、其の熱きを濯うを貴ぶなり、昔僧の塋に表して、華嚴塔と曰う、其の人を徳とするなり、其の嶺の峻絶なる者を指して、樵歌嶺と曰う、野事を樂しむなり、其の亭に名づけて、暎發亭と曰う、王子敬の山川相暎發すの謂に取るなり、其の山の谷を目して、楊梅塢と曰う、嘉果を別つなり、其の閣に榜して、清隱閣と曰う、其の以て靜なるべきを以てなり、竹に就き軒を闢して、脩竹軒と曰う、其の操に擬するなり、是の十詠なる者は、擧げて法雲精舎に屬す、

ここで、翠樾堂・陟崖門・嘯月徑・夏涼泉・華嚴塔・樵歌嶺・暎發亭・楊梅塢・清隱閣・脩竹軒といった十の景物名がもつそれぞれの意味あるいは典故をはっきり述べていることが注目される。この序文がいうように、精舎周辺の景觀を今までよりいっそう美しくするのために、これらの十景を撰したのである。そのほか、南宋の范成大が編纂した『呉郡志』卷三十三「郭外寺・堯峰院」条に同院の十景が記されており、

堯峰院、在吳縣橫山、即唐免水院也、院有十景、謂清輝軒、碧玉沼、多境巖、寶雲井、白龍洞、觀音巖、偃蓋松、妙高峰、

東齋、西隱、

堯峰院は、吳縣の橫山に在り、即ち唐の免水院なり、院に十景有り、清輝軒、碧玉沼、多境巖、寶雲井、白龍洞、觀音巖、偃蓋松、妙高峰、東齋、西隱と謂う、

という。この条目のあとに付された詩文から、これらの十景が実は北宋末の禅僧の懷深（一〇七七—一一三二）の作った「山居十詠」から取られたことがわかる。これも前出の「法雲十詠詩叙」と同じく、十詠に詠まれたものがそのまま十景として受け取られているのである。『呉郡志』の成書年代は南宋の紹定二年（一二二九）で、これは中国禅林における五山十刹制度の成立年代⁽⁸⁾とほぼ同時期であり、この時期、五山十刹をはじめとする禅院において十景の選定が盛んに行われていたものと思われる。

「山居十詠」の主題が禅院の十景に変わったことは決して偶然ではない。「十詠」「十題」が「十景」に変化するプロセスはさらに「十境」へとつながるもので、「十境」は「十詠」「十題」を踏襲したものと考えられる。両者の共通点としては、形式だけでなく、選定の内容が似ていることに注目すべきであろう。

前述したように、「天童十題」と「和雲外和尚天童十境韻」とは、選定された景物の内、五つが重なっており、また内容的には同じく禅院の建物や周辺の景物が含まれている。ただ、「十境」となると、

禅院の建物でいえば、山門・法堂・仏殿・僧堂・方丈・衆寮・塔といった伽藍の建物が多く見えるようになるが、禅院という修行の場からみれば、必然の成り行きといえよう。要するに、禅院における十境の選定は、こうした「十詠」「十題」の影響を受けて出来たものであり、忽然と作り出されたものではないと考えられるのである。

3 「瀟湘八景」と禅院の八景

八景といえ、瀟湘八景ほど有名なものはない。これはまた瀟湘八景図と瀟湘八景詩の二種類、すなわち画と詩に分けられている。

八景図創始者は北宋の宋迪であるといわれているが、^⑩同時代の沈括(一〇三二〜九五)が著した『夢溪筆談』巻十七「書画」には、

度支員外郎宋迪工畫、尤善爲平遠山水、其得意者、有平沙雁落、遠浦帆歸、山市晴嵐、江天暮雪、洞庭秋月、瀟湘夜雨、烟寺晚鐘、漁村落照、謂之八景、好事者多傳之、

度支員外郎宋迪 畫に工なり、尤も善く平遠山水を爲す、其の意を得たる者は、平沙雁落、遠浦帆歸、山市晴嵐、江天暮雪、洞庭秋月、瀟湘夜雨、烟寺晚鐘、漁村落照有り、之を八景と謂い、好事者多く之を傳う、

とあって、宋迪が八景図にすぐれていたことが記されている。

いっぽう、前出の覚範慧洪は八景詩の始祖とされ、その八景詩が『石門文字禅』巻八に収められている。その序文には、

宋迪作八境絶妙、人謂之無聲句、演上人戲余曰、道人能作有聲畫乎、因爲之、各賦一首、

宋迪八境を作ること絶妙、人之を無聲句と謂う、演上人余に戯れて曰く、道人能く有聲畫を作らんか、因て之を爲し、各おの一首を賦す、

とみえ、無聲句といわれた宋迪の八景図に倣って、覚範慧洪は有声画としての八景詩を作ったのである。宋迪の八景図にせよ、覚範慧洪の八景詩にせよ、その題名と内容からわかるように、特定の地名を冠しているのは瀟湘夜雨と洞庭秋月の二景に過ぎず、しかも瀟水・湘水・洞庭湖といった河川、湖水は広大な地域を抱えているため、具体的な場所の特定はできない。すなわち、具体的な実景に特定せず、個々の景物を写したものでないのが本来の八景図・八景詩の共通点であった。

しかし、北宋末の徽宗朝(一一〇〇〜二五)になり、瀟湘八景図の制作が盛行した後、八景の選定がいたるところで流行ると、一つ一つの実景について特定の景物を八景に選ぶのが特徴となる。たとえば、『古今圖書集成』巻千二百十三「長沙府部彙考十三・長沙府

古跡考」には、載っているすべての府県に、八景あるいは十景が見える。「本府」八景の説明によれば、少なくとも洞庭秋月・漁村夕照・烟寺晚鐘に、それぞれ蓮花潭・南湖港・水陸寺と特定の景物の名が記されている。宋迪の八景図や覚範慧洪の八景詩に較べると、实景のイメージがかなり強くなっているのである。八景に見られるこうした変化が禅院の八景選定にも影響をあたえたと考えられる。以下、日本の場合を中心に考察してゆきたい。

中国で発生した瀟湘八景図・八景詩は入宋僧・入元僧や渡来僧によって日本に将来された。渡来僧の一山一寧（在日一二九九〜一三一七）賛、思堪筆の「平沙落雁図」が日本における最初の作例といわれている。鎌倉末に導入されたこの種の瀟湘八景図は室町時代に入ると、いっそう盛んに受け入れられるようになった。これらの八景図は、四季絵・月次絵・名所絵といった大和絵と共鳴して、一種の変化を見せる¹³⁾。

まず、季節の順序である。本来、瀟湘八景図のうち、季節感をもつ主題は山市晴風の初夏、洞庭秋月の秋、平沙落雁の秋、江天暮雪の冬であるが、必ずしも春・夏・秋・冬という四季の移行の順には配列されていない。しかし日本の場合、瀟湘八景屏風画を例にすると、山市晴風に始まり、中程に洞庭秋月・平沙落雁を置き、江天暮雪で終わるといふ画面構成のパターンとなつてしまひ、初夏から秋・冬へと向かう季節の順序がはっきりしてくるのである。八景図

を四季の移行の順に配列するという表現は、四季絵や月次絵の大和絵に基づくもので、俳句に季節感を表わす季語が必要なように、瀟湘八景図にも季節感を表わすことが不可欠となつてくる。

次にこれら八景図の名所絵的傾向である。前述したように、宋迪の瀟湘八景図は实景を特定せず、必ずしも個々の景物を写したものはなかった。これは現存する伝牧溪・玉澗の瀟湘八景図断簡からもいくぶんは想像できよう。すなわち、その画意は水と空気と光の合成によつてかもし出される詩情の表現にあつたものと思われる。

しかし日本に導入されてから、八景図の各主題は、山市・夜雨・帰帆・漁村・秋月・落雁・晚鐘・暮雪と、それぞれ独立した画面構成が出来、一種の名所絵的傾向が見られるようになる。日本における瀟湘八景図は、少なくとも以上の屏風画を見る限りでは、四季絵・月次絵・名所絵といった大和絵の手法を取り入れて、個々の景物を時間的かつ空間的に具体化するようになったのである。

瀟湘八景詩の日本における最初の作例は渡来僧の大休正念（在日一二六九〜八九）の瀟湘八景詩¹⁴⁾である。日本の禅林における瀟湘八景詩の発生・普及・衰退については、朝倉尚氏の「瀟湘八景」詩——禅林における三転期¹⁵⁾——という論考がある。これによると、

- ① 瀟湘八景詩の発生・移入——承久の乱〜南北朝の争乱期
- ② 瀟湘八景詩の普及・隆盛——南北朝の争乱〜応仁の乱期
- ③ 瀟湘八景詩の爛熟・衰退——応仁の乱〜安土・桃山期

の三段階に分けられている。

ここで注目したいのは②の普及・隆盛期で、これはまた三期に区分され、南北朝の争乱から尊氏・義詮時代の普及期、義満・義持時代の消化期、義教時代から応仁の乱の隆盛期（衰退の萌芽）までとなっている。普及期では渡來僧や入元僧の作品の多いことが特徴で、清拙正澄や雪村友梅（在元一三〇七〜二九）、中岩円月（在元一三二五〜三二）らの作品が挙げられる。消化期には義堂周信（一三二五〜八八）や絶海中津（二三三六〜一四〇五）とかれらの法嗣・門生を中心にかなりの作品がのこされているが、隆盛期になると、八景詩の数は前期をさらに上回っている。②の普及・隆盛期について、朝倉氏はつぎのように指摘している。

前期（普及・消化期）の瀟湘八景詩は、詩型の面からも内容の面からも比較的に自由であり、各僧の各詩はそれなりに個性的であったように思われる。この期（隆盛期）の八景詩は、瀟湘八景に対して容易に具体像を作り上げることができるようになり（換言すれば、画一的な觀念世界しか作り得ず）、類型化の徴候が見られてくる。¹⁶⁾

なかなか示唆に富む指摘であり、ここにいう「具体像」「画一的」「類型化」とは、パターン化を意味するものと思われる。たとえば、

夕照が斜暉・夕陽・斜曛・斜陽・夕照・夕日・残照・返照・淡陰・紅滿天などの語彙を中心に描写され、帰帆の場合には、回帆・蒲帆・飛帆・空帆・片帆・風帆・帰帆・輕帆・古帆・孤帆などの語が非常に多く使われている。こうしてみると、瀟湘八景詩も八景図と同じく、日本に導入された後、ある種のパターンが形成されていたのである。

瀟湘八景詩のほか、日本の禅僧はまたこの様式をもとにして「〇〇八景（あるいは十景）」を選定し詩に詠じた。比較的早期の例として、鉄庵道生（二二六二〜一三三二）の「博多八景」¹⁷⁾などが挙げられる。

香椎暮雪

縮螺自白鳥邊斷、天地都無一寸青、歸棹只隨夕陽去、載家何處扣吟局、

縮螺自ら白く鳥邊斷たれ、天地都て一寸の青無し、歸棹只だ夕陽に隨つて去り、載家何れの處にか吟局を扣かん、

箱崎蠶市

行盡松陰沙背路、路頭盡處到江湄、東邊賣了西邊買、落日晚風吹酒旗、

行は松陰に盡く沙背の路、路頭の盡くる處江湄に到る、東

邊に賣了し西邊に買う、落日の晚風 酒旗を吹く、

長橋春潮

飢虹偃傍春霏飲、人踏飢虹飲處行、湍雪渾濤伍員恨、不知何
日得澄清、

飢虹傍に偃して春霏に飲み、人は飢虹を踏みて飲處に行く、
湍雪の渾濤は伍員の恨み、知らず何れの日にか澄清するを得
ん、

莊濱泛月

地角天涯行遍了、又於西海盡頭遊、桂枝露滴望東眼、蜃氣薄
時看白鷗、

地角天涯 行きて遍し、又た西海の盡頭に於て遊ぶ、桂枝の
露滴は東を望む眼、蜃氣の薄き時 白鷗を看る、

志賀獨釣

未羨韓彭興漢室、豈謀利祿廢清遊、扁舟一葉滄波上、載得乾
坤不盡秋、

未だ羨まず 韓彭の漢室を興すを、豈に利祿を謀りて清遊を
廢せん、扁舟一葉 滄波の上、載せ得たり 乾坤 不盡の秋、

浦山秋晚

三十年前貪勝概、幾回飛夢落烟巒、而今老倒看圖盡、兩鬢秋
吹霜後山、

三十年前 勝概を貪り、幾回か夢を飛ばして烟巒に落つ、而
今老倒して圖を看ること盡き、兩鬢 秋に吹かる霜後の山、

一崎松行

山奔海口逐奔鯨、激起秋濤月夜聲、欲問巢雲孤鶴夢、霜苔千
載石根清、

山は海口に奔りて奔鯨を逐い、激起せる秋濤 月夜の聲、巢
雲に問わんと欲す 孤鶴の夢、霜苔千載 石根清し、

野古歸帆

晚樓極目水天寬、雲影收邊山影寒、杳々遙疑泛鳧、梨花一
曲過漁灘、

晚樓 目を極むれば水天寬く、雲影 邊に收まりて山影寒し、
杳々遙かに疑う 泛鳧、梨花 一曲 漁灘を過ぐ、

これらは博多地方の景物を選んだものと思われるが、それぞれの
主題や内容から春・夏・秋・冬といった季節感と個々の景物のもつ
場所性を読み取ることができ、瀟湘八景を念頭ににして作られた作品

と位置づけられよう。

実は「〇〇八景」という様式は、禪院の八景の選定にも使われている。これらの八景は十境と同じく、境致の一種とも考えられ、八景を境致に転用したものと見なすべきであろう。

『扶桑五山記』二には、

大慈寺（中略）

十境、檳榔塢、菡萏峰、衣明殿、雲秀溪、綠池、潮音閣（山門）、拈華堂（法堂）、烹金爐（方丈）、止々庵、清涼軒

八景、龍山春望、古寺綠蔭、漁浦歸舟、橋邊暮雨、江上夕陽、

東營秋月、西塞夜雪、野市炊煙

臨照山西岸禪寺（中略）

八景、慈雪晚鐘、清湖夜月、春社花木、秋社風露、砥橋跨虹、

荻野環翠、飛陽濯痰、三濟修禊

とある。

ここで、十境のほかに、八景も禪院の境致として選ばれているのが注目される。そのうち、大慈寺八景に対しては「日向州竜興山大慈禪寺八景」の題で、禅僧一〇一人がその詩を作り、義堂周信が「大慈八景詩歌集叙」を製している。この序によると、今川了俊（一三二五～一四二〇）が鎮西探題として九州地方に在任中、当地の

山水、とりわけ大慈寺の境致を愛し、その八景を詠じた詩歌がないのを惜しんだため、瞬庵宗久という歌の上手な者を都に派遣し、五山をはじめとする詩歌に堪能な禅僧に大慈寺八景を作詩させたという。

大慈寺八景について、この序には、

大慈八景、其曰龍山春望、言宜乎春也、曰古寺綠蔭、言宜乎

夏也、漁浦歸舟、以詠漁父也、曰埜市炊烟、以樂市隱也、曰橋

邊暮雨、示防卒暴也、曰江上夕陽、示迫桑榆也、其山城宜月者、

曰東營秋月、所以警夜也、其宜雪者、曰西塞夜雪、所以戒不

虞也、

大慈八景、其の龍山春望と曰うは、春に宜しきを言うなり、

古寺綠蔭と曰うは、夏に宜しきを言うなり、漁浦歸舟は、以て

漁父を詠むなり、埜市炊烟と曰うは、以て市隱を樂しむなり、

橋邊暮雨と曰うは、卒暴を防ぐを示すなり、江上夕陽と曰うは、

桑榆に迫るを示すなり、其の山城の月に宜しき者、東營秋月と

曰うは、夜を警する所以なり、其の雪に宜しき者、西塞夜雪と

曰うは、不虞を戒める所以なり、

という。これら八景にも季節感・場所性・個々の景物を見いだすことができ、瀟湘八景の影響が色濃く反映されている。また、大慈寺

八景について注目すべき記録がもう一つある。それは義堂周信の日記『空華日用工夫略集』三の康暦二年（一三八〇）七月十八日条の一部で、

爲清祖侍者求、改八景目子、蓋日向州龍興山大慈寺境致也、

清祖侍者の求めの爲に、八景の目子を改む、蓋し日向州龍興山

大慈寺の境致なり、

とある。ここで大慈寺八景を「大慈寺の境致」と明言していることが重要である。また、禅僧の詩歌にもこれに似通った表現が見られ、いずれも大慈寺八景が境致であることを物語っている。

大慈寺八景や西岸寺八景といった禅院の八景は、瀟湘八景の影響を受けながらもそれに較べて、個々の景物のイメージが強くなってきており、しかも山・湖・橋・花木などといった境致によく使われる素材が多く含まれている。

このように、中国で発生した瀟湘八景という主題は、禅僧によって日本に導入された後、八景図や八景詩とともに変化を起し、季節感と場所性が強調されるようになった。やがて、これが禅院の境致の選定に影響をあたえ、禅院においても十境と同じく、八景を選ぶようになったのである。これら十境や八景がいずれも禅院の境致であることは言うまでもない。

4 日本の禅院における十境の発達

前述したように、日本の禅院における十境選定の早期のものとしては、渡来僧の明極楚俊の「題建長寺十境」、同じく渡来僧の清拙正澄の「東山十境」が挙げられる。これらはいずれも中国の渡来僧（あるいは日本の入元僧）によって導入されたものである。

これを契機として日本の禅僧の間に十境の選定が流行った。中でも夢窓疎石の「天龍寺十境」が最も著名である。京五山、すなわち五山之上の南禅寺、五山第一の天龍寺、五山第二の相国寺、五山第三の建仁寺、五山第四の東福寺、五山第五の萬寿寺といった禅院すべてに十境が選ばれ、いっぽう、鎌倉五山のうち、五山第一の建長寺でも十境が選ばれている。以下、京五山、鎌倉五山を中心にして、日本の禅院における十境の発達を考察したい。

南禅寺は、くわしくは太平興国南禅寺といい、山号を瑞菴山という。正応四年（一二九二）、龜山上皇は三井寺の別院であった離宮の禅林寺殿を禅院に改め、聖一国師の法嗣の無関普門を開山として招き童安山禅林寺と称した。正安年間（一二九九～一三〇二）に南禅寺と改められ、徳治二年（一三〇七）に准五山、建武元年（一三三四）正月二十六日に五山第一となり、ついで至徳三年（一三八六）七月十日に五山之上にのぼった。

『扶桑五山記』二によれば、南禅寺境致として、五山之上・毘盧頂

上・金剛殿・曇華堂・近水院・五鳳楼・雲堂・鎖春亭・羊角嶺・蔵春峽・愈好亭・帰雲洞・合澗橋・蘿月菴・独秀峰・參竜池・竜淵室・霜花岩・神仙佳境・牢度梯・蒼菊林・綾戸廟・雪隠・表率寮・望仰・竜蟠・虎嘯・結集・景雪・扱木・思忠・内史・小玉・化檀という計三十四ヶ所の境致名が挙げられており、そのうち、独秀峰・羊角嶺・帰雲洞・參竜池・曇華堂・鎖春亭・蘿月菴・綾戸廟・愈好亭・蒼菊林が十境となっている。

これは、『雍州府志』(巻八)、『山域名勝志』(巻十三)に見えるものの、選定者のことはわからない。ただ、『蔭涼軒日録』長禄二年(二四五八)六月十一日の条によると、八代將軍足利義政(在職一四四九〜七三)が南禅寺御成の際、同寺の泉水を遊覧し、十境を見て回った²⁰⁾とあり、当時すでに十境ができ、上は將軍から下は文人や禅僧までの觀賞対象になっていたことがわかる。

天龍寺は、くわしくは天龍資聖禅寺といい、山号を靈龜山という。檀林皇后が唐の禅僧義空を招いて開いた檀林寺の旧蹟で、そののち後嵯峨・龜山・後醍醐の三天皇にゆかりの深い離宮、龜山殿となった。足利尊氏・直義兄弟は後醍醐天皇の冥福を祈るため、暦応二年(二三三九)、夢窓疎石の勧めに従って、ここに寺を建て靈龜山資聖禅寺と称したが、翌年、天龍資聖禅寺と改めた。開山は夢窓疎石である。暦応四年(二三四二)八月二十三日に五山第二となり、至徳三年(二三八六)七月十日に五山第一位に列せられた。

『扶桑五山記』三によれば天龍寺境致として、普明閣・曹源池・三級岩・万松洞・竜門亭・龜頂塔・拈華嶺・度月橋・靈庇廟・絶唱溪・天下竜門・法雷堂・集瑞軒・選仏場・覚皇宝殿・洞鑑・聯芳という計十七ヶ所の境致名が挙げられており、そのうち、普明閣・絶唱溪・靈庇廟・曹源池・拈華嶺・度月橋・三級岩・万松洞・竜門亭・龜頂塔が十境となっている。

『天龍開山夢窓正覚心宗普济国師年譜』²¹⁾によると、貞和二年(二三四六)の春二月、「教外別行之場」を表わすために、夢窓は「天龍寺十境」²²⁾を賦し、自ら序を作った。天龍寺十境の選定は同寺建立後の早い時期に行われたことになる。

普明閣

廣大慈光照世間、善財當面隔重關、眼皮横蓋虚空界、彈指開門匹似閑、

廣大なる慈光 世間を照らし、善財 面に當りて重關を隔つ、眼皮は横蓋す 虚空界、彈指して門を開けば閑なるに匹似す、

絶唱谿

灘聲激出廣長舌、莫謂深談在口邊、日夜流傳八萬偈、灼然一字未嘗宣、

灘聲激し出だす 廣長舌、謂う莫かれ 深談は口邊に在りと、

日夜流傳す八萬の偈、灼然たる一字未だ嘗て宣せず、

靈庇廟

精藍分地建靈宮、專冀神風助祖風、莫怪庭前松屈曲、天真正直在其中、

精藍地を分かちて靈宮を建て、専ら冀う神風の祖風を助けんことを、怪しむ莫かれ庭前松の屈曲せるを、天眞の正直は其の中に在り、

曹源池

曹源不涸直臻今、一滴流通廣且深、曲岸回塘休著眼、夜闌有月落波心、

曹源は涸れず直ちに今に臻り、一滴流通して廣く且つ深し、曲岸回塘著眼するを休めよ、夜闌にして月有り波心に落つ、

拈華嶺

靈山拈起一枝萼、分作千株在此峰、只見聯芳至今日、不知劫外幾春風、

靈山に拈起す一枝の萼、分かれて千株と作りて此の峰に在り、只だ見る芳を聯ねて今日に至るを、知らず劫外に幾春風ぞ、

度月橋

虹勢截流橫兩岸、一條活路透清波、度驢度馬未爲足、玉兔三更推轂過、

虹勢流れを截ちて兩岸に横たわり、一條の活路清波を透る、度驢度馬は未だ足と爲さざるに、玉兔は三更に轂を推して過ぐ、

三級巖

分危布險作三重、水激雲遮路不通、無限金鱗遭點額、誰知徧界起腥風、

危を分かち險を布きて三重と作し、水は激し雲は遮りて路通ぜず、無限の金鱗額に點せられ、誰か知らん徧界に腥風を起すを、

萬松洞

萬株松下一乾坤、翠靄氛氳鎖洞門、仙境由來屬仙客、莫言此地匪桃源、

萬株の松下の一乾坤、翠靄氛氳として洞門を鎖す、仙境由來仙客に屬す、言う莫かれ此の地は桃源に匪すと、

龍門亭

不借巨靈分破拳、兩山放出一洪川、三更夜半無來客、數片歸雲宿檻前、

巨靈に借りず分破の拳、兩山は放出す一洪川、三更の夜半に來客無く、數片の歸雲檻前に宿る、

龜頂塔

松生背上緣毛長、頂戴浮圖萬劫祥、戶牖恢開不藏六、重重法界目前彰、

松は背上に生じて緣毛長く、浮圖を頂戴するは萬劫の祥、戶牖恢く開きて六を藏せず、重重たる法界目前に彰らかなり、

その後、数多くの禪僧がその韻に和して偈を書いた。たとえば、

日本に着いたばかりの渡來僧の東陵永瓊（在日一三五〜六五）も夢窓の要請で一偈を頌した。⁽²³⁾ そのほかに、日本禪僧の乾峰士曇（一

二八五〜一三六一）の「天龍十景、和夢窓国師韻」がある。

また天龍寺十境について、『太平記』卷廿四には次のように描かれている。

この開山国師、天性水石に心を寄せ、浮萍の跡を事とし玉ひしかば、水に傍ひ山に依り、十境の景趣を作られたり。所謂大士応化の普明閣、塵々和光の靈鹿窟、天心秋を浸す曹源池、金

鱗尾を焦す三級岩、これに對せる竜門亭、三壺を捧ぐる龜頂塔、雲半間の万松洞、不言の笑を開く拈花嶺、無声に音を聞く絶唱溪、銀漢に上る度月橋。この十景のその上に、石を集め烟嶂の色を仮り、樹を栽多ては風濤の声を移す。慧崇が烟雨の図、章偃が山水の景にもいまだ得ざりし風流なり。⁽²⁴⁾

相国寺は、くわしくは相国承天禪寺といい、山号を万年山という。永徳二年（一三八二）に二禪院を創立しようとした足利義満（在職一三六八〜九四）は、春屋妙葩（一三一〜一八八）・義堂周信に相談をもちかけ、春屋・義堂の建議によって寺号を承天相国と定めた。同三年（一三八三）、義堂の提案によって新寺は相国承天禪寺と改められ、夢窓疎石を勧請開山とし、春屋自ら二世となっている。至徳三年（一三八六）七月十日に五山第二位に列せられた。

『扶桑五山記』四によれば、相国寺境致として、祝釐堂・護国廟・円通閣・功德池・大宝塔・洪音楼・天界橋・竜淵水・般若林・妙莊嚴域・覚雄宝殿・鉄鷄・金鳥・無畏堂という計十四ヶ所の境致名が挙げられており、そのうち、祝釐堂・護国廟・円通閣・大宝塔・洪音楼・功德池・天界橋・竜淵水・般若林・妙莊嚴域が十境となっている。

『蔭涼軒日録』嘉吉元年（一四四一）二月十五日の条によると、六代將軍の足利義教（在職一四二九〜四一）が鹿苑院に参詣した際、

僧録の季瓊真蕊(？)一四六九)は相国寺十境を書いて献上し、また天界橋の図を示した⁽⁸⁾という。相国寺十境は季瓊によって選定されたものと思われる。

建仁寺は山号を東山といい、開山は明庵栄西、開基は源頼家である。建仁二年(一一〇二)、將軍頼家の庇護を受けた栄西は、宿願の京都進出を果たし、六波羅の北端に建仁寺を開いた。最初は天台・真言・禪の三宗兼学の道場とされたが、しだいに純粋な禅院になっていった。建武年間(一一三三~一一三八)に五山となり、曆応四年(一一三四)八月二十三日に五山第四、至徳三年(一一三六)七月十日に五山第三位に列せられた。

『扶桑五山記』四によれば、建仁寺境致として、慈視閣・望闕楼・大悟堂・群玉林・入定堂・楽神廟・無尽灯・清水山・第五橋・鴨川水・三世如来殿・清涼軒・拈華堂・雪隠・悦可・表率・夢升・等慈・竜藏・虎林・春会・希真という計二十二ヶ所の境致名が挙げられており、そのうち、慈視閣・望闕楼・大悟堂・群玉林・入定堂(正しくは入定塔)・楽神廟・無尽灯(十鏡灯とも称す)・清水山・第五橋・鴨川水が十境となっている。建仁寺十境は、前述したように、渡来僧の清拙正澄によって選定されたもので、同内容の「東山十境」がのこされている。

慈視閣

有情無情入我眼、我眼偏入情無情、正見正知觀自在、瞳人雙倚玉欄橫、

有情無情 我が眼に入り、我が眼偏く情無情に入る、正見正知 觀自在、瞳人 雙つながら玉欄に倚りて横たわる、

望闕樓

百級雲梯眼界寬、不違咫尺觀天顏、夜摩走入三門上、億萬山河盡笑歡、

百級の雲梯 眼界寬く、咫尺を違えず天顏に觀ゆ、夜摩走り 入る 三門の上、億萬の山河 盡く笑歡す、

大悟堂

選佛場開集勝流、心空及第是良籌、誰從暗裏輕移步、踏著文殊脚指頭、

選佛場開きて勝流を集め、心空にして第に及ぶは是れ良籌、誰か暗裏從り軽く歩を移し、踏著せん 文殊の脚指頭、

群玉林

垂棘懸黎蘊德輝、琳瑯環植富瑰琦、莫愁大寶無酬價、世有良工盡得知、

垂棘懸黎 德輝を蘊み、琳瑯の環植 瑰琦に富む、愁うる莫か

れ大寶は酬價無きを、世に良工有らば盡く知るを得ん、

入定塔

親見虚菴得正傳、色身堅似法身堅、憑誰爲鑄黃金磬、敲出蘿龕箇老禪、

親しく見る虚菴に正傳を得るを、色身の堅きは法身の堅きに似たり、誰に憑りて鑄を爲さば黃金磬きん、敲き出だす蘿龕の箇の老禪、

樂神廟

吉備行祠自古靈、開山迎奉護禪庭、三千眷屬常圍繞、鐵騎追風鬼眼青、

吉備の行祠古自り靈あり、開山迎奉して禪庭を護る、三千の眷屬常に圍繞し、鐵騎風を追い鬼眼青し

無盡燈

須彌爲炷海爲油、十面磨銅法界周、此土他方塵數佛、灼然不隔一絲頭

須彌は炷爲り海は油爲り、十面の磨銅法界周し、此土他方塵數の佛、灼然として一絲頭を隔てず、

清水山

巖崕奇峰紺色幽、寒泉千尺下峰頂、百川浩浩知多少、箇是圓通第一流、

巖崕たる奇峰紺色幽に、寒泉千尺峰頂より下る、百川浩浩として多少なるを知らん、箇れはれ圓通の第一流、

第五橋

半虚空裏獨橫身、接盡中途未到人、濁界衆生何日了、誰知脚下是通津、

半虚空裏に獨り身を横たえ、接し盡くす中途未到の人、濁界の衆生何れの日にか了せん、誰か知らん脚下は是れ通津なるを、

鴨川水

覺頂波光似漢江、澱青疑可染衣裳、曾從加茂宮前過、滴滴醍醐徹底香、

覺頂の波光は漢江に似、澱青疑うらくは衣裳を染むべし、曾て加茂従り宮前過ぎ、滴滴醍醐徹底の香、

元弘三年（一三三三）の十月二十日、後醍醐天皇の勅により、清拙正澄は鎌倉の建長寺から上京し、建仁寺の第二十三世住持に就任

した後、建武三年（一二三六）の春から夏に南禅寺に遷住した。「東山十境」はこの間に選定したものとわれ、「建長寺十境」とな
らんで、十境の早期のものといえよう。

東福寺は山号を恵日山といい、嘉禎二年（一二三六）九条道家が
発願し、寛元二年（一二四四）聖一国師円爾を招いて開山とした。
最初は天台・真言・禅の三宗兼学の寺院であったが、しだいに純粹
な禅院になっていった。建武年間（一二三四〜三八）に五山となり、
暦応四年（一二四二）八月二十三日に五山第五、至徳三年（一二三
八）七月十日に五山第四位に列せられた。

『扶桑五山記』五によれば、東福寺境致として、選仏場・梅檀林・
竜吟水・甘露水・通天橋・二老橋・臥雲橋・思遠池・洗玉澗・三笑
橋・五社宮・妙雲閣・無伽軒・千松林・潮音堂・五社・解空堂とい
う計十六ヶ所（五社宮と五社とは同一物である）の境致名が挙げられ
ており、そのうち、妙雲閣・選仏場・潮音堂・梅檀林・思遠池・成
就宮・通天橋・千松林・甘露井・洗玉澗が十境となっている。東福
寺十境は、すでに「東福寺伽藍図」の了庵桂悟（一二二五〜一五一
四）による贊²⁸（永正二年、一五〇五）に見え、『雍州府志』巻九にも
その記述がある。

萬寿寺は山号を九重山という。永長二年（二〇九七）、白河上皇
は皇女郁芳門院媞子内親王の遺宮を仏寺に改め、これを六条御堂と
いった。浄土教の寺院であったが、正嘉年間（一二五七〜五九）十

地覚空・東山湛照が禅院に改め、萬寿寺とした。延文三年（二三五
八）九月二日に五山となり、至徳三年（一二三八）七月十日に五山
第五位に列せられた。

『扶桑五山記』五によれば萬寿寺境致として琴台・十地超閑・大雄
宝殿・三山神廟・千松客径・枯木回春・新花更雨・東軒・南院・鏡
沼という計十ヶ所の境致名が挙げられている。

また『京城萬寿禪寺記』によると、これらの境致は景南英文が宝
徳三年（一四五二）に選定した萬寿寺十境であり、景南はまたこれ
について偈頌を作っている。

東軒虚豁包南院、海上三山當處開、夜月無心臨鏡沼、暮雲有
意傍琴臺、新華雨遂空談散、枯木春從冷坐回、親禮大雄超十地、
千松夾逕接方來、

東軒は虚豁にして南院を包み、海上の三山は處に當たりて開
く、夜月は無心にして鏡沼に臨み、暮雲は意有りて琴臺に傍う、
新華の雨は空談を遂げて散じ、枯木の春は冷坐に従りて回る、
親しく大雄を禮するは十地を超え、千松は逕を夾みて方來に接
す、

建長寺はくわしくは建長興國禪寺といい、山号を巨福山という。
建長元年（一二四九）北条時頼の発願によって創建され、同五年

(一一二五三)に落成したため、年号にちなんで建長寺と名づけられた。渡来僧の蘭溪道隆(在日一二四六〜七八)が開山に迎えられている。鎌倉末期に五山となり、ついで暦応四年(一二四二)八月二十三日に五山第一位に列せられた。

『扶桑五山記』三によれば、建長寺境致として、拈華堂・毘盧宝閣・大徹堂・嵩山・得月楼・逢春閣・竜王殿・玄関・蘸碧池・聴松・天津橋・栴檀林・円通閣・対神閣・海眼・截流橋・応真閣・法輪宝蔵・松下軒・華嚴塔・摩霄閣・照心・海東法窟・天下禪林・玲瓏岩・三千仏・曇華堂、ほかに十寮を加えて計三十七ヵ所の境致名が挙げられており、そのうち、玄関・大徹堂・得月楼・逢春閣・拈華堂・蘸碧池・華嚴塔・嵩山・玲瓏岩・円通閣が十境となっている。建長寺十境は前述したように、渡来僧の明極楚俊によって選定されたもので、「題建長寺十境^⑧」が作られている。

玄関

巨關門何妙、來鋒不敢當、峻機纒透徹、圓應便通方、大道誰留礙、迷途自著忙、古今凡與聖、來往更無妨、
巨きく關ける門何ぞ妙なる、來鋒 敢て當らず、峻機 纒かに透徹し、圓應 便ち通方たり、大道 誰か留礙せん、迷途 自ら著忙、古今の凡と聖と、來往 更に妨げ無し、

大徹堂

當機領旨深、妙悟廓禪心、撲落虛空碎、掀翻大地沈、燈籠超果位、露柱證圓音、一點靈光在、暉暉耀古今、
當機 旨を領すること深く、妙悟 禪心を廓む、撲落として虛空碎け、掀翻して大地沈む、燈籠は超果の位、露柱は證圓の音、一點の靈光在りて、暉暉として古今に耀く、

得月樓

百尺聳危臺、軒窗面水開、銀魚腥不到、玉兔影先來、初印波心靜、旋移松頂回、夜深觀未足、更復小徘徊、
百尺 危臺聳え、軒窗 水に面して開く、銀魚 腥到らず、玉兔 影先ず來る、初印 波心靜かに、旋移 松頂回る、夜深きも觀未だ足らず、更に復た小しく徘徊す、

逢春閣

東皇司令早、暖律已潛回、淑氣排簷入、韶光透戸來、草芽穿土出、花蕊向陽開、臺樹多生意、功歸造化魁、
東皇 令を司ること早く、暖律 已に潛回す、淑氣 簷を排して入り、韶光 戸を透かして來る、草芽 土を穿ちて出で、花蕊 陽に向いて開く、臺樹 生意多し、功は造化の魁に歸せん、

拈華堂

金色一頭陀、觀機眼力殊、旨明拈起處、妙顯破顏初、即此非他物、從來錯認渠、燈籠瞞露柱、百萬只茫如、
金色の一頭陀、機を觀るに眼力殊なり、旨明らかなるは拈起する處、妙顯わるるは破顏の初、即ち此れ他物に非ず、從來渠を錯認す、燈籠 露柱を瞞き、百萬只だ茫如たり、

蘸碧池

誰鑿地爲沼、寒泉涵泳深、青林浮水面、翠巘浸波心、豎看山形側、橫觀樹影沈、晚游成勝賞、聊作五言吟、
誰か地を鑿ちて沼と爲す、寒泉 涵泳して深し、青林は水面に浮かび、翠巘は波心に浸る、豎に看れば山形側き、横に觀れば樹影沈む、晚游して勝賞を成し、聊か五言の吟を作す、

華嚴塔

佛現舍那身、頓機人罕聞、深窮華藏海、廣演竺乾文、密護加欄楯、祕函標相輪、都盧高七級、千古鎮乾坤、
佛は舍那身を現わすも、頓機 人罕に聞く、深く窮む 華藏の海、廣く演ぶ 竺乾の文、密護 欄楯に加わり、祕函 相輪に標とす、都盧 高きこと七級、千古 乾坤を鎮む、

嵩山

五嶽標中岳、屹居天地心、衡常如侍衛、岱華似恭欽、慧日輝幽谷、慈風動少林、孰知西祖意、昭顯海東岑、
五嶽 中岳を標とし、屹居す 天地の心、衡常は侍衛の如く、岱華は恭欽なるに似たり、慧日 幽谷に輝き、慈風 少林を動かす、孰か知らん 西祖の意、海東の岑に昭顯するを、

玲瓏巖

不假人穿鑿、天生怪狀奇、嵌空八面透、峻峭一方危、靈竺比難及、羅浮類莫齊、肯容來宴座、閑惹雨華飛、
人の穿鑿に假りず、天は生ず 怪狀の奇なるを、嵌空 八面透り、峻峭 一方危し、靈竺 比及び難く、羅浮 類齊しき莫し、肯て容れて宴座に來らしめ、閑かに 雨華を惹きて飛ばしむ、

圓通閣

聞思修證得、圓應十方通、耳聽衆色別、眼觀諸響同、朱門嚴像設、白屋奉眞容、此閣何神驗、靈光魯殿雄、
聞思 修證して得て、圓應 十方に通ず、耳に衆色の別を聴き、眼に諸響の同じきを觀る、朱門 嚴像設け、白屋 眞容を奉ず、此の閣 何の神驗ぞ、靈光 魯殿に雄たり、

元徳二年（一三三〇）二月、明極楚俊は関東に到着すると、北条高時によって建長寺の住持とされた。元弘元年（一三三二）、建長寺を退くと、寺内に構えた雲沢庵に閑居している。建長寺十境を選定し、題詩を作ったのは恐らくこの間と思われ、「東山十境」とならんで、十境の早期のものといえる。また、乾峰士曇による「巨福山十題次明極和尚韻」があり、明極の建長寺十境の韻に和したものである。

さらに五山のほか、十刹・諸山でも十境の選定が行われており、『扶桑五山記』や『宗派目子』などには、十境の名を明記したものが数多く見られる。まず、十刹における十境の例を見よう。

越前弘祥寺の十境、頭陀峰・連雲石・甘露水・新豊亭・逢渠橋・精進溪・安居渡・万桑里・三曲洲・深竜淵。
日向大慈寺の十境、檳榔塢・菡萏峰・衣明殿・雲秀溪・緑池・潮音閣・拈華堂・烹金炉・止々菴・清涼軒。
相模大慶寺の十境、覚華・□蔭・富月・雪谷・古鏡池・白花橋・竜尾水・蛇眠石・独木橋・愈好軒。
山城妙光寺の十境、降魔室・対神軒・五通廟・大徹堂・紫金台・宝陀閣・甘露井・坐禅石・澄靈・歳寒。
宝林永昌禅寺の十境、法華宝塔・靈神廟・飛雪岩・円通宝殿・望江楼・普門境・翡翠橋・白幡城・横翠嶺・蔵春塢。

法雲昌国禅寺の十境、曹源池・利生塔・甘露泉・仙遊洞・補陀岩・岷峨山・濯錦江・博奕石・飄花岩・涌金峰。
つぎに諸山の十境の例を見よう。

三河実相寺の十境、靈光廟・三嶋軒・万松洞・西江水・垂虹橋・宿鷺池・南陽江・有孚井・無尽蔵（欠一名）。
土佐吸江寺の十境、粹適庵・吞海亭・磨甌堂・見国嶺・玄夫島・潮音洞・白鷺洲・雨華岩・独鈷水・泊船岸。
大隅正興寺の十境、靈山浄土・石体・八相石・仏跡石・竹林精舎・虚空会・白鷺池・指月橋・玲瓏岩・悟道井。
薩摩大願寺の十境、万松林・甘露泉・潜竜峰・夜星河・天香亭・落水橋・馬立原・白虎嶺・蓬壺洞・二水渡。
豊後大智寺の十境、不二菴・禅居・松月・大雄院・金粟院・竹隠・本立・自牧・巢松・独芳軒。
丹後雲門寺の十境、鎮海軒・撥深閣・滋福水・大義田・金鰲嶋・白鷺洲・菖蒲澗・翡翠岩・抽筆峰・出経岸。
肥前万寿寺の十境、恵峰・双澗・劍閣・石屏・青霞嶺・白蓮峰・笕水石・左手石・鳳凰石・竜王池。
伊勢金剛証寺の十境、明星水・連珠水・住仏谷・金池・呑海・獅子岩・深壺峰（欠三名）。

以上、列挙した十境の内容から見ると、禪院の十境（境致も同様）は大きく二種類に分けることができる。すなわち、伽藍を主とする

禅院の建築物と山川を主とする禅院の自然景観である。前者には山門・法堂・仏殿・僧堂・方丈・衆寮といった伽藍および亭・橋などがあり、後者には山・川などの自然物のほか、池・井戸などのいわゆる半自然物が含まれている。

山門は古くは三門と称し、空・無相・無願の三解脱門を象徴するといわれる。禅院の三門は、外門・中門・正門の三つに分けられ、「五山十刹図」の「諸山額集」には外山門・中門・正門の別がある。現在でいう山門は正門、すなわち正山門の略であり、また、外山門は略して外門と呼ばれ、禅院の境界に入るところの門である。山門も外門もその多くに門額といった標識があり、境致に選ばれたもののほとんどがこうした扁額の掛けられた建物である。

たとえば、天龍寺の普明閣（山門上層）や相国寺の円通閣（山門上層）、建仁寺の望闕楼（山門上層）、東福寺の妙雲閣（山門上層）などが挙げられる。その他の五山の十境には山門が見えないものの、ほとんどの禅院では山門が境致に選ばれている。これは恐らく山門のもつ象徴性と機能性によるものと思われる。山門に入ることは、俗世を解脱する意味がある。また、重層山門の上層には千仏や五百羅漢などの像が安置されている。しかも、眺望が十境の重要な構成要素であることをあわせて考えると、山門の上層も眺望のために使われたのであろう。

これは中国五山の境致にも見られ、前出の別源円旨による「和雲

外和尚天童十境韻」には「登閣」という偈頌があり、千仏閣に登って周辺の景色を満喫した時の感想を詠んだものである。また、建仁寺の望闕楼について、「翰林五鳳集」巻一に瑞岩による「望闕楼春眺」が載っており、

望闕高樓對帝城、楣閒誰昔獨佳名、掖花清柳吟眸裏、撩起唐僧應制情、

望闕の高樓 帝城に對す、楣閒誰か昔獨り佳名、掖花清柳吟眸の裏、撩起す唐僧應制の情、

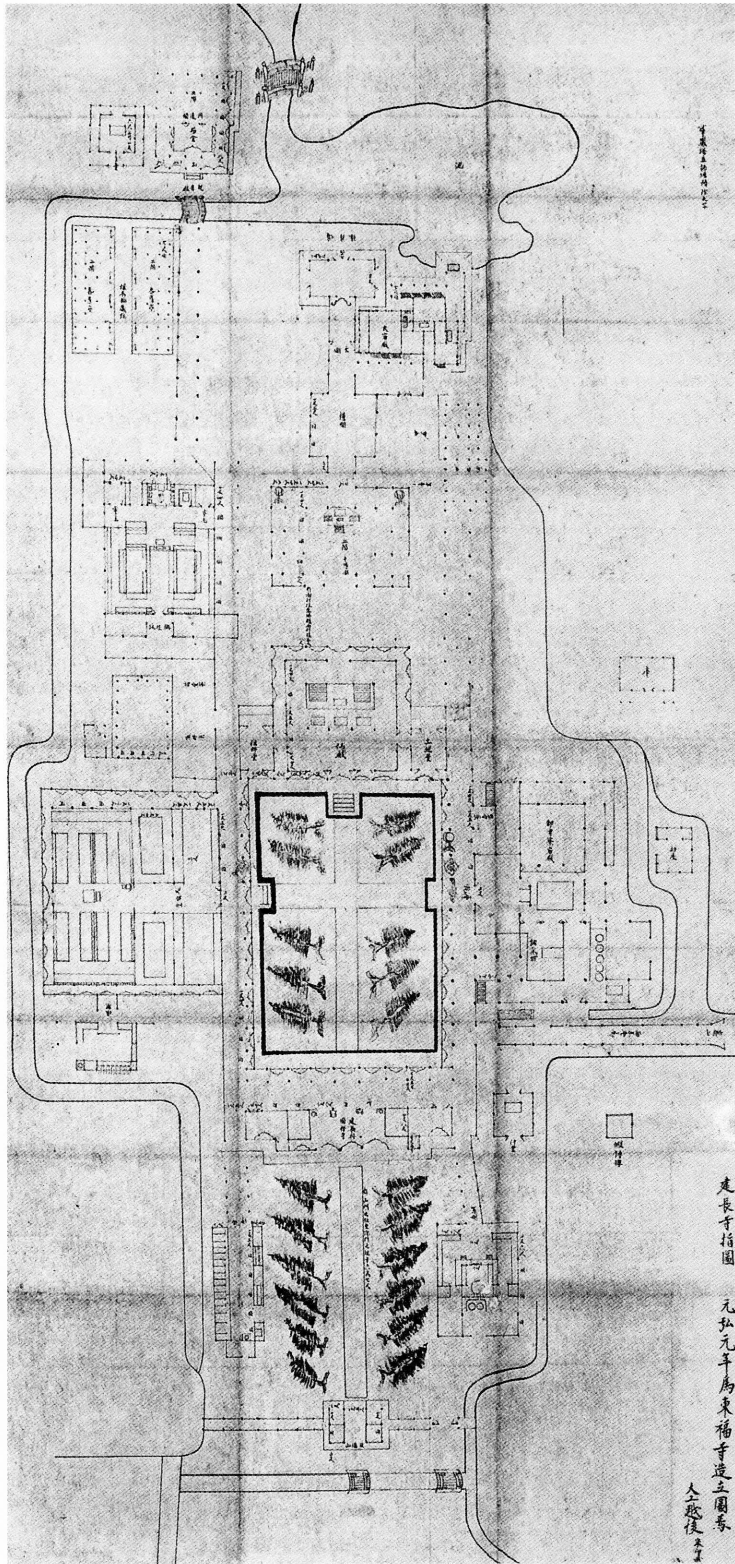
とある。これらによると、当時、樓閣建築が盛んに造られ、山門の上層に登って景色を眺めることが流行ったことがわかる。

法堂は法を説く堂の意で、禅院では住持が上堂などを行う道場である。宋の承天道原編『景德伝灯録』（景德元年、一〇〇四）巻六には「禅門規定」があって、百丈懷海（七四九―八一四）が制定した清規の一部を引いている。その中に、

不立佛殿、唯樹法堂者、表佛祖親受當代爲尊也、

佛殿を立てず、唯だ法堂を樹つるは、佛祖の親しく當代を受くるを表すを尊しと爲すなり、

写真1 建長寺指図 建長寺(神奈川県)所蔵



とあって、当時の禪院では仏殿よりも法堂のほうが重要視されたことがわかる。中国五山の第一位に列せられた径山寺を例にすると、『径山志』巻十二「径山興聖万寿禪寺」の条に「十七年、真歇建大雄殿」とあり、真歇清了が紹興十七年（一一四七）に径山寺の仏殿を始建したとする。すなわち、径山寺創建以来、仏殿が建立されず、百丈清規の古制が南宋初期まで続いたことになる。⁵⁵ 径山寺が禪林に占める位置から考えると、これがほかの禪院にあたえた影響も大きかったと思われる。こうした影響を反映するかのようには、中国五山の例を見ると、いずれも仏殿を境致に入れず、その反面、靈隱寺の直指堂、浄慈寺の宗鏡堂のように、法堂が二禪院で境致に選ばれている。

日本の五山では、南禪寺の曇華堂（十境）や天龍寺の法雲堂、相国寺の法雷堂、建仁寺の拈華堂、東福寺の潮音堂（十境）、建長寺の拈華堂（十境）、円覚寺の直指堂などが挙げられる。そのうち、建長寺の拈華堂は法堂の一層で、その上層の毘盧宝閣も境致に選ばれている。また、「建長寺指図」（写真1）の法堂にも「二階、千仏閣」と記されており、建長寺の法堂が重層であったことがわかる。いっぽう、「五山十刹図」には「杭州径山寺法堂様」という断面図が載っている。上層に「二界」と記され、重層の楼閣建築であることを物語っている。建長寺の法堂は径山寺など当時の中国の禪宗建築を導入したものと推測され、また、法堂が重層であることも法堂

重視の表われの一つだと考えられる。

仏殿は本尊をまつる堂で、伽藍の中心的な建物とされるが、前述したように、古制が続いた禪院では必ずしもそうではなかった。『景德伝灯録』巻八の「汾州無業禪師」に、

巍巍佛堂、其中無佛、

巍巍たる佛堂、其の中に佛無し、

とあり、また明の円極居頂編『続伝灯録』巻三の「竜潭智円禪師」に、

問、古殿無佛時如何、師曰、三門前合掌、

問う、古殿の佛無き時は如何と、

師曰く、三門の前に合掌せよと、

とみえて、いずれも前述の「不立仏殿、唯樹法堂」と同じく、仏殿や仏像を軽視する点が共通している。極端な例として、宋の希叟紹曇撰『五家正宗贊』（宝祐二年、一二五四）巻一にある徳山宣鑿伝では、徳山が住院した時、仏殿を破壊し、法堂のみを残したと伝えている。これは中国五山の境致の選定にも如実に反映されており、境致の中に仏殿が見あたらず、十刹を含めても中天竺寺の摩利支殿と

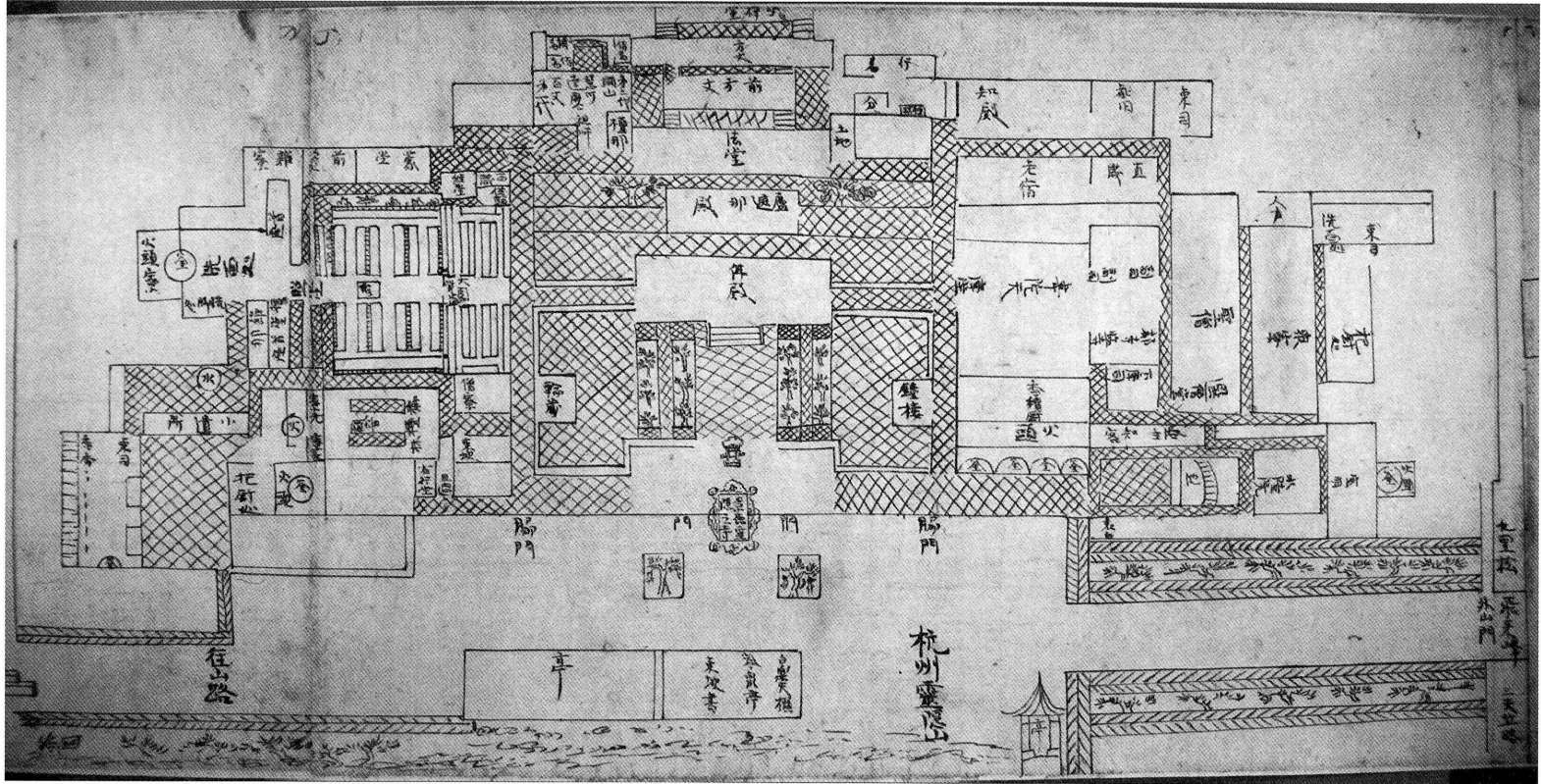


写真2 靈隱寺配置図（曹洞宗宗宝影印本刊行会編『五山十刹図』より）

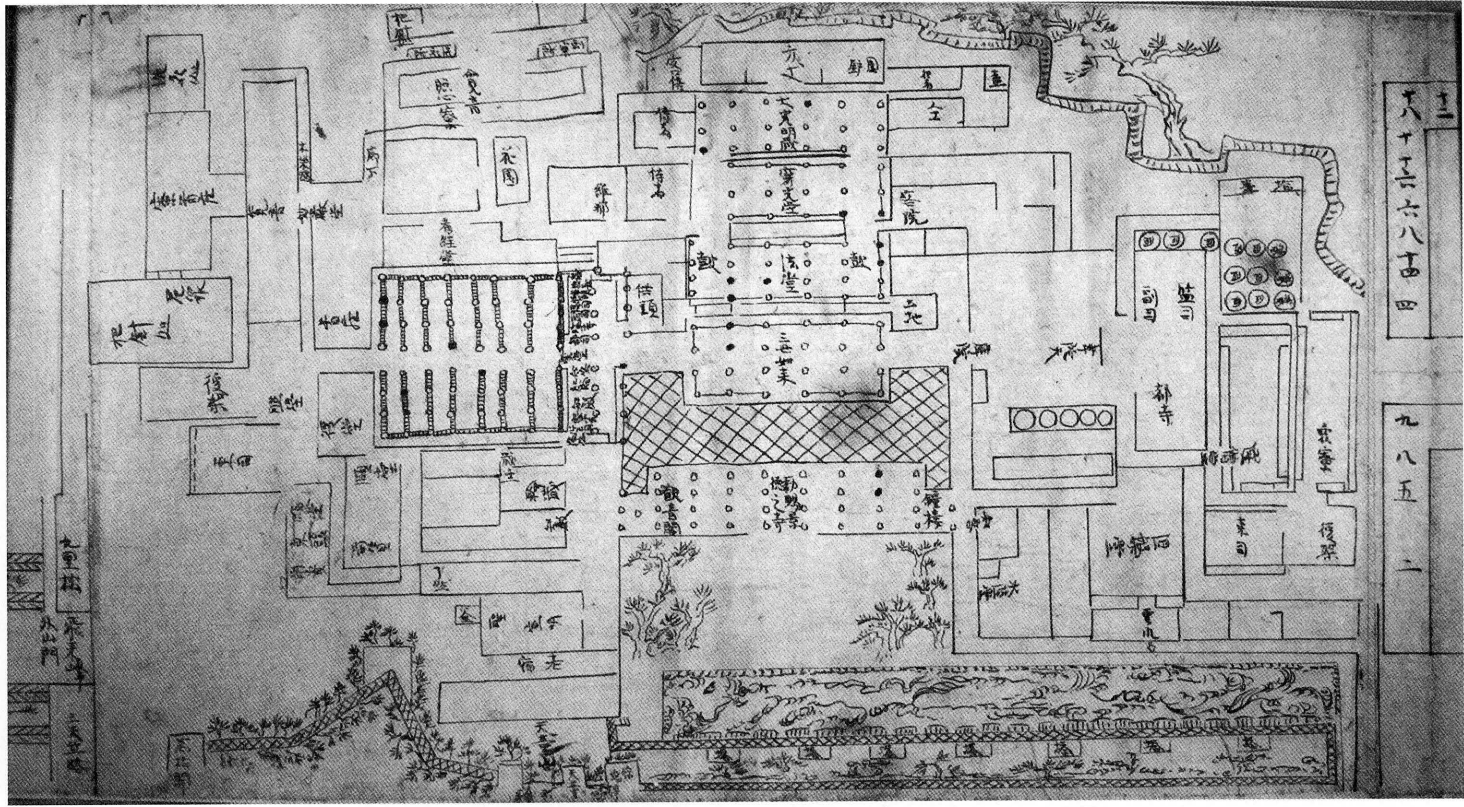


写真3 天童寺配置図(曹洞宗宗宝影印本刊行会編『五山十刹図』より)

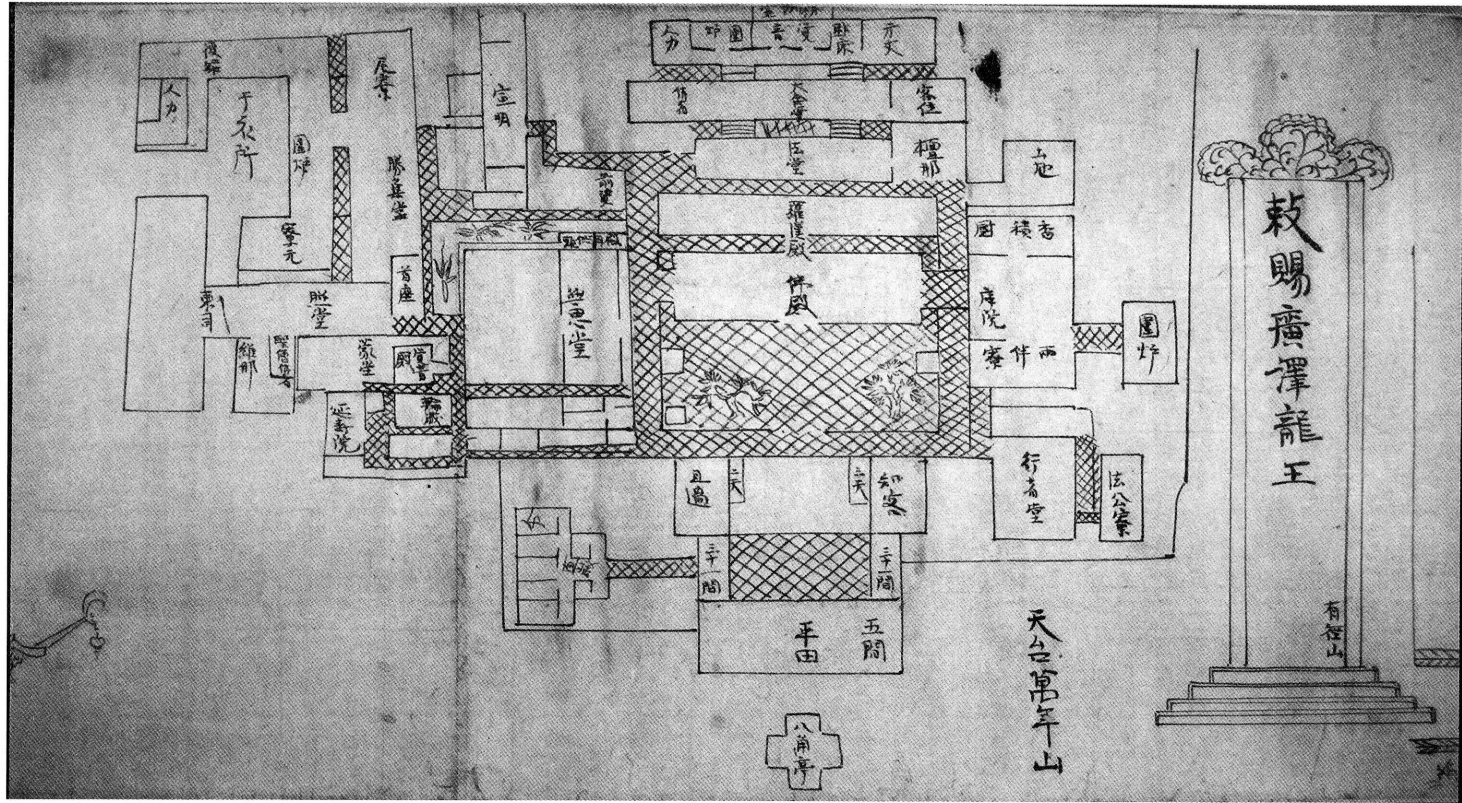


写真4 万年寺配置図（曹洞宗宗宝影印本刊行会編『五山十刹図』より）

国清寺の毘盧境の二カ所があるのみである。

しかし、日本の五山の例を見ると、十境に選ばれたものこそ少ないが（萬寿寺の大雄宝殿のみ）、南禅寺の金剛殿をはじめ、天龍寺の覚皇宝殿、相国寺の覚雄宝殿、建仁寺の三世如来殿、それに円覚寺の大光明宝殿、寿福寺の三仏殿など、多くが境致に選ばれている。

禅院の伽藍が日本に導入された時代は中国の南宋後期にあたる。先に挙げた径山寺の大雄殿、中天竺寺の摩利支殿はいずれも南宋初めに建てられたものと見られ、南宋初期以降、中国の禅院では、仏殿を中心伽藍として建立したり、復活させたりするようになったものと思われる。日本禅院の祖形といわれる「五山十刹図」には天童寺・靈隠寺・万年寺の配置図（写真2、3、4）があり、すべて仏殿が中心部に建立されている。すなわち、日本が導入した禅院の伽藍配置は南宋以降のものと推測されるのである。

山門・法堂・仏殿のほかに、僧堂・方丈・衆寮・寮舎・塔および鎮守堂なども境致あるいは十境に選ばれている。とくに方丈とその周辺が何カ所も境致に選ばれていることは注目に値する。

方丈は住持の居所であり、また禅僧を集めて坐禅・教化にあたる大道場でもある。「五山十刹図」では、天童寺・靈隠寺・万年寺の方丈がいずれも法堂の背後に位置し、靈隠寺では前方丈・方丈・坐禅室、天童寺では寂光堂・大光明蔵・方丈、万年寺では大舎堂・楞伽室と記されている。また同図の「諸山額集」によると、寂光堂・

大光明蔵は天童寺の前方丈の額銘、大舎堂は万年寺の前方丈、楞伽室は同寺の内方丈の額銘であるとされており、当時の禅院には前方丈と内方丈が存在し、前方丈は公的な場所で坐禅・教化を行う道場であり、これに対して内方丈は私的な居室で住持が居住・休息する場所であることがわかる。中国五山の例で見ると、径山寺では、前方丈の不動軒、内方丈と思われる竜淵室、それに不動岩も入れて、方丈およびその周辺が三つも境致に選ばれている。

いっぽう、日本の五山では、最も典型なのが建長寺の方丈およびその周辺における境致の選定である。『扶桑五山記』三には、得月楼・逢春閣・竜王殿・玄関・蘸碧池・聴松軒・対神閣の七つが挙げられており、「建長寺指図」とあわせて見ると、「礼間」の背後に「玄関・大客殿・得月楼」があり、その後ろに池、蘸碧池が描かれている。大客殿を前方丈、竜王殿・得月楼・逢春閣を内方丈とするなら、前方丈と内方丈が建長寺に存在したことになるが、得月楼・逢春閣・蘸碧池は建長寺十境にも選ばれている。ほかに、南禅寺の毘盧頂上（上層）、天龍寺の集瑞軒（書院）、円覚寺の平等軒、寿福寺の扶桑興禅之閣などが境致に、建仁寺の慈視閣が十境に選ばれている。方丈およびその周辺が多く境致に選ばれたことには二つの原因が考えられる。一つは方丈が住持の居室で、日常生活の場としての性格をもっているため、環境美化などの点から建物や山石、池などを境致に選んだことである。もう一つは坐禅・教化の道場として

時には法堂の役割（たとえば、前出の径山寺の不動軒）も兼ねていたことである。方丈も山門や法堂と同じように、その多くが重層の楼閣建築であった。これは当時の禅院では楼閣建築が盛んに造られたことを物語っている。また、方丈上層も眺望のために使われていた。

『蔭涼軒日録』長祿二年（一四五八）二月廿九日の条には、

建仁寺御成、……上于慈観閣東山御一覽、

建仁寺御成り、……慈観閣に上りて東山御一覽、

とあり、足利義政が建仁寺を訪れた時、慈観閣に登って東山の景観を眺めたことがわかる。

鎮守は護伽藍神を祀る堂であり、中国五山には当然その例が見えない。日本の五山でも、鎌倉五山にはそれが境致に選ばれた例がない。いっぽう、京五山ではすべて鎮守が境致あるいは十境に選ばれており、たとえば、南禅寺の綾戸廟や天龍寺の霊庇廟、相国寺の護国廟、建仁寺の衆神廟、東福寺の五社宮、萬寿寺の三山神祠が挙げられる。境致あるいは十境の選定にあたって、鎌倉五山は中国五山の影響を強く受けている。たとえば、建長寺開山の蘭溪道隆や円覚寺開山の無学祖元（在日一二七九〜八六）は元来中国の禅僧であり、建長寺十境を選定したのも渡来僧の明極楚俊であった。

これに対して、京五山では境致あるいは十境の選定に日本的要素

が入っており、鎮守はその典型的な例である。鎮守の祭神について見ると、ほとんどが日本あるいは土地の神々であることがわかる。^⑧

たとえば、南禅寺は綾戸神、天龍寺・相国寺は八幡神、建仁寺は兼御前神、そして東福寺では八幡・春日・稻荷・賀茂・山王の諸神を祀っている。禅院に鎮守堂を設け、伽藍鎮護を祈ることは神仏混淆という奈良時代からの伝統を受け継いだものと見られ、境致に選ばれたのもこのためであろうと思われる。

禅院の伽藍のほかに、境致に数多く見られるのが亭・橋である。まず亭の姿を見ることが出来る。中国五山では、五禅院のうち、浄慈寺を除くと、少なくとも一寺に一つの亭が境致に選ばれており、天童寺の翠鎖亭は同寺の十境にも入っている。禅院の立地から、亭のほとんどが山頂や水際あるいは水中に建てられていた。山頂に設けられた亭としては、径山寺の含暉亭・流止亭、阿育王寺の玉几亭があり、水際あるいは水中の亭としては、霊隠寺の冷泉亭（水中）・壑雷亭（澗上）、天童寺の宿鷲亭（池上）があり、これは「五十刹利図」の霊隠寺・天童寺の配置図にはっきりと示されている。亭の役目は眺望が主であり、これは亭に関する数多くの詩文によって立証される。また、禅僧による眺望行為には俗世を解脱する意味^⑨も含まれていたであろう。同じ建築物でも、禅院の伽藍に較べると、亭は文学的なイメージが強く、その構成要素の一種として禅院空間を豊かにするものであった。

日本の五山でも、亭が境致あるいは十境に選ばれてはいるが、その数は中国五山に較べると少ない。これは禅院の立地条件に関係していると思われる。たとえば、南禅寺の鎖春亭・愈好亭や天龍寺の竜門亭は築山や丘の上に設けられ、浄智寺の妙高亭は山頂に建てられている。すなわち、寺域の周辺に山などの比較的高い場所があるかどうか、亭の建設ひいては境致への選定に大きく影響を及ぼしているのである。また、境致としての名は見えないが、関東十刹第一の瑞泉寺に徧界一覽亭があり、これは夢窓疎石が瑞泉寺を開いた翌年の嘉暦三年（一二三二）、錦屏山の山頂に設けられたものであろう。夢窓疎石は「徧界一覽」の偈^④を題し、明極楚俊や清拙正澄などの渡来僧もまた詩を賦している。

橋も禅院の境致あるいは十境に選ばれている。日本の五山では、南禅寺の合澗橋、天龍寺の度月橋（十境）、相国寺の天界橋（十境）、建仁寺の第五橋（十境）、東福寺の通天橋（十境）・二老橋・臥雲橋・三笑橋、そして建長寺の天津橋・截流橋、円覚寺の偃松橋などが境致に選ばれている。

寺域内のものでなく、寺域外の橋も借景として禅院の境致あるいは十境に取り入れられている。これは中国五山にその先例が見られる。たとえば、浄慈寺の境致には六橋、すなわち、映波橋・鎖瀾橋・望山橋・庄堤橋・東浦橋・跨虹橋が選ばれており、広大な西湖とともに、同寺の借景とされていたのである。度月橋や第五橋も

借景として天龍寺や建仁寺の境致に選ばれたものと思われる。なお、橋の様式として、亭・橋が合体した、いわゆる亭橋（廊橋とも称す）が当時流行っており、東福寺の通天橋や建長寺の天津橋がこうした亭橋だったろう。

山や川が禅院全体の境致、あるいは十境に占める比率は高い。中国五山の径山寺を例にとると、寺の主山である凌霄峰のほか、五峰（鉢盂峰・鵬搏峰・冥坐峰・大人峰・朝陽峰）や七峰の一つである御愛峰と、あわせて七つの峰が選定され、この寺の境致の三分の二を占めている。中国五山はすべて山を控えた山岳寺院あるいは山麓寺院で、山が境致に選ばれているのは、これらの禅院の立地および周辺の環境によるものと考えられる。

日本の五山では、鎌倉五山、とくに建長寺・円覚寺の場合には、禅院の立地から伽藍の配置や諸堂の形式に至るまで、いずれも南宋の禅院を模範にしているため、境致の選定にも中国五山の影響を強く受けていることは言うまでもない。中でも、浄智寺では、天柱峰・回鸞峰・鵬搏峰・鳳栖嶺と四つも境致に選ばれているのがよい例である。京五山でも、境致の選定にあたって、山を非常に重視していた。南禅寺の十境に選ばれている独秀峰は、元来、隣の岩蔵寺のものであったが、これを買入れ寺の主山としたのである。また、嵐山の一峰である拈華峰は、大井川を隔てて天龍寺の南に位置しているが、同寺の十境の一つにもなっている。さらに清水山は建仁寺

から遠く離れているにもかかわらず、借景として同寺の境致、しかも十境に選ばれている。

いっぽう、山と深い関係をもつものに岩(石)や洞窟があり、中国五山だけでなく、日本の五山でもこれが境致あるいは十境として選ばれている。たとえば、南禅寺の帰雲洞、天龍寺の万松洞、建長寺の玲瓏岩がそれぞれの寺の十境に選ばれており、その他の岩や洞窟も十境に選ばれてはいないものの、その多くが境致に入っている。境致に山を多く選定した禪院では、岩あるいは洞窟も選ばれる傾向がある。もし山を借景と呼ぶならば、岩や洞窟は一種の点景ではないかと思われる。

川や溪流も山・岩・洞窟と同じく、禪院の境致選定に重要な役割を果たしてきた。中国五山では、浄慈寺の場合、広大な西湖が境致として取り入れられている。日本の五山の例では、天龍寺の絶唱溪(十境)、すなわち大井川、建仁寺の鴨川水(十境)、相国寺の竜淵水(十境)、東福寺の洗玉澗(十境)などが挙げられる。

川や溪流のほか、池・井戸・泉なども禪院の境致に多く見られ、これは中国五山も日本の五山も同様であった。天童寺の万工池、南禅寺の參竜池(十境)、相国寺の功德池(十境)、東福寺の思遠池(十境)、円覚寺の白鷺池などがその例として挙げられる。

しかし、日本の五山では、天龍寺の曹源池(十境、方丈)、建長寺の蘸碧池(十境、方丈)、円覚寺の妙香池(塔頭)など、禪院の方

丈・塔頭に池などが境致として設けられている。これは中国五山に見られない現象で、方丈の住宅化や塔頭の日本における独自の発達に関係するものであろう。

最後に樹木、とくに松を中心に見てみたい。中国五山では、靈隱寺の九里松径、天童寺の門外二十里松径が境致に選ばれている。境致には見えないが、径山寺にも松径があった。十刹では、靈谷寺で五里松、国清寺で十里門松が境致に選定されている。同様の事例は日本の五山でも見られ、萬寿寺の千松夾径は恐らく千本の松を植えた参道が存在したことを意味するのであろう。また、境内や山門の前、塔頭の門前にも松などの植樹が行われていた。⁴⁴⁾「建長寺指図」では、山門と仏殿との間に柏樹と思われる樹木が植えられているのが見える。松などの樹木を山門の境致とするのは恐らく臨濟慧照(？)八六七)に始まると思われる。その語録『臨濟録』行録に、

師栽松次、黄檗問、深山裏栽許多作什麼。師云、一與山門作境致、二與後人作標榜。道了、將鏝頭打地三下。⁴⁵⁾

師、松を栽うる次で、黄檗問う、深山裏に許多を栽えて什麼か作ん。師云く、一には、山門の與に境致と作し、二には、後人の與に標榜と作さん、と道了了って、鏝頭を將って地を打つこと三下す。

と見えることから、松は禪院境致の先駆けとなつていたといえよう。

さて、日本の禪院の十境選定について、寛正年間（二四六〇〜六六）、京五山第五の萬壽寺に住した天佑梵叡が同五年（二四六四）に撰した『京城萬壽禪寺記』で、つぎのように述べている。

……寶德三年壬申、余與住持月谷諸老宿相謂曰、大小名利、大半有十境之名、未必天造地設、萬壽境中新撰十名則可矣哉、即往前往天下大老東福景南和尚、請撰其名、和尚一々撰之、曰十地超關、大雄寶殿、新花更雨、枯木回春、東軒、南院、琴臺、鏡沼、三山神祠、千松客逕、乃結十境以四韻一偈、曰、東軒虛豁包南院、海上三山當處開、夜月無心臨鏡沼、暮雲有意傍琴臺、新華雨遂空談散、枯木春從冷坐回、親禮大雄超十地、千松夾逕接方來、寶德壬申孟秋日、前任當山景南英文、八十八歲、謹書、蓋大雄寶殿、南院、琴臺者、不改舊名也、鹿苑竺雲大和尚跋十境偈曰、寺必當有十境耶、十地寶覺、筆路藍縷之始、弘安辛巳以來、百七十餘歲之間住持者幾人、寓居者幾人、胡爲缺焉不爲之哉、不當必有十境耶、仍舊貫、如之何、何必改作今也、夫十者非自天而降、亦非從地而涌、蓋出當人之胸次、而竦一世之耳目、響者晷夕于茲者、如唯識其面、而未知其名、而見其面、則靄然眉目、驩爾心胸、頽壁毀垣、古松老柏、精氣一新、是所謂世必有非常之人、而後有非常之事也、……

……寶德三年壬申、余住持月谷諸老宿と相謂いて曰く、大小の名利、大半は十境の名有るも、未だ必ずしも天造地設ならず、萬壽の境中に新たに十名を撰ばば則ち可ならんかと、即ち前任天下の大老東福景南和尚に往きて、其の名を撰ばんことを請う、和尚一々之を撰ぶ、曰く、十地超關、大雄寶殿、新花更雨、枯木回春、東軒、南院、琴臺、鏡沼、三山神祠、千松客逕と、乃ち十境を結ぶに四韻の一偈を以てす、曰く、東軒は虚豁にして南院を包み、海上の三山は處に當りて開く、夜月は無心にして鏡沼に臨み、暮雲は意有りて琴臺に傍う、新華の雨は空談を遂げて散じ、枯木の春は冷坐に從りて回る、親しく大雄を禮するは十地を超え、千松は逕を夾みて方來に接す、寶德壬申孟秋の日、前に當山に住す景南英文、八十八歲、謹んで書すと、蓋し大雄寶殿、南院、琴臺なる者は、舊名を改めざるなり、鹿苑竺雲大和尚十境の偈に跋して曰く、寺には必ず當に十境有るべきか、十地寶覺は、筆路藍縷の始なり、弘安辛巳以來、百七十餘歲の間に住持する者幾人ぞ、寓居する者幾人ぞ、胡爲れぞ缺焉として之を爲さざるか、當に必ずしも十境有るべからざるや、舊貫に仍らば、如何、何ぞ必ずしも改めて今と作さんや、夫れ十なる者は天自りして降るに非ず、亦た地從りして涌くに非ず、蓋し當人の胸次に出でて、一世の耳目を竦つ、響に茲に晷夕する者、唯だ其の面を識りて、未だ其の名を知らざるが如

し、而も其の面を見れば、則ち靄然たる眉目、爾の心胸を驪はしめ、頽壁毀垣、古松老柏、精氣一新せん、是れ所謂 世に必ず非常の人有りて、而る後に非常の事有るなり、……

以上の一節は、萬寿寺十境の選定の経緯を述べると同時に、日本の禪院の十境選定に関するいくつかの重要な事柄にも触れている。

まず、「大小名刹、大半有十境之名」ということである。これまで見てきたように、五山・十刹・諸山では、等級の別なく十境が選ばれている。また、五山のような大禪院では、十境のほかにも、境致として数多くのものが選定されている。では、これら十境と境致とはどのような関係にあったのであろうか。ふつう、十境とは境致の内から重要なものを選んだと思われるが、必ずしもそうではない。むしろ十境をもとにして、ほかのものが加えられ、禪院の境致を形成していったのではないかと考えられる。五山はもちろんのこと、十刹・諸山のように比較的規模が小さく、境致の記載がない禪院でも、十境の選定は行われていた。建長寺をはじめ建仁寺や天龍寺・相国寺・萬寿寺の十境を、『扶桑五山記』にある、それぞれの禪院の境致と較べあわせて見ると、ほとんどの禪院で十境が境致の上位十位までを占める。そのうち、建仁寺や相国寺の場合、十境と境致の十位までが順位もまったく同じものとなっている。十刹・諸山に十境が多数見られるのも、同様の発想にもとづくもので

あろう。すなわち、十境は禪院の境致に欠かせない存在となっているのである。

次に、十境の選定の日本の禪院への導入と普及である。その初期の頃には、中国からの渡来僧や入元僧が果たした役割が大きかった。建長寺十境を選定した明極楚俊や、建仁寺十境を選定した清拙正澄はいずれも来日した高僧であった。明極楚俊は元徳元年（一三二九）、竺仙梵僊などに伴われて来日し、翌年京都に到着、同年関東に下ると、北条高時によって建長寺の住持とされた。元弘元年（一三三一）、建長寺を退き、寺内に構えた雲沢庵に閑居した後、元弘三年（一三三三）、後醍醐天皇の招きを受けて、南禅寺第十三世の住持に就任した。翌年夢窓疎石に位をゆずり、建仁寺第二十四世の住持に遷住し、建武三年（一三三六）示寂した。『語録』六巻があり、『明極楚俊遺稿』は、『明極和尚語録』のうち住山録や仏事法語を除いたもので、「題建長寺十境」が収められている。

清拙正澄は泰定三年（一三二六）来日し、翌年北条高時の招きを受け、建長寺第二十一世の住持となると、靈隱寺の制に倣い、清流・指臨・荔香・宗蒲・起汾・冽泉・景揚・思恭・畊道・用則の十寮を建てた。これらはその後いずれも建長寺の境致に選ばれている。元徳元年（一三二九）浄智寺に、翌年円覚寺第十六世の住持に遷住した。元弘三年（一三三三）、後醍醐天皇の勅により、上京して建仁寺第二十三世の住持に就任した。建武三年（一三三六）、南禅寺

第十四世の住持に遷任し、暦応元年（一三三八）退院した後、翌年示寂した。『語録』二巻、詩文集『禪居集』二巻および『大鑿清規』一卷があり、「東山十境」が『禪居集』に収められている。

また、入元僧のうちでは、弘祥寺十境を選定した別源円旨や、宝林永昌禪寺十境・法雲昌国禪寺十境を選定した雪村友梅などがその代表である。別源円旨は元応二年（一三二〇）二十七歳で入元し、金陵の鳳台山保寧寺で古林清茂に参調し偈頌を学んだ。その後、天童山の雲外雲岫や天目山の中峰明本などの高僧に歴参し、雲外や古林の会下で侍者・藏主などの職をつとめた。十一年も在元した後、元徳二年（一三三〇）に帰国している。「和雲外和尚天童十境韻」を収めた『南遊集』は在元時の詩偈集で、雲外雲岫が序を寄せ、その偈頌を「句意不凡」とたたえた。帰国後、康永元年（一三四二）、越前の朝倉広景の招きにより弘祥寺開山に迎えられた。同寺の十境は別源円旨によるものである。

雪村友梅は幼い頃、渡来高僧の一山一寧の侍童となり、友梅の名も一山がつけたという。徳治二年（一三〇七）から元徳元年（一二九二）まで、二十余年も在元した。その間、諸尊宿に歴参し、士大夫を友として、経・史・諸子を読破し、名山・旧跡を周遊した。スパイの嫌疑で投獄され、流刑に処されるといふ苦勞を重ね、最後には元の朝廷から宝覺真空禪師の称号を賜与された。帰国後、山城の嵯峨西禪寺（一三三二〜三四）、豊後の蔭山万寿寺（一三三四〜

六）、さらに萬寿寺（一三四三）、建仁寺（一三四五）にそれぞれ住した。宝林永昌禪寺十境・法雲昌国禪寺十境は雪村友梅によるもので、両寺とも雪村友梅を開山として迎えている。雪村が在元時作つた詩偈集に『岷峨集』がある。

さらに、当時の元朝を訪れていない日本の禅僧のうちでも、少なからぬ者が十境の選定に加わっている。これには、夢窓疎石（天龍寺十境）や、虎関師鍊（景陽十境^註）、季瓊真蕊（相国寺十境）、景南英文（萬寿寺十境）、天祥一麟（大願寺十境）などがあり、最も著名なのが夢窓疎石である。夢窓疎石は少年時に密乗を習い、中国禅宗の名刹である疎山・石頭に夢の中で遊んだことから、禅宗に縁があると自覚し、法名を疎石と改めたという。その後、蘭溪道隆の弟子である何人かの禅僧を師と仰ぎ、一山一寧や高峰頭日などの中日の高僧に歴参し、高峰の印可を得た。隱遁生活をくり返した後、正中二年（一三二五）、後醍醐天皇の勅により南禅寺に住する。翌年鎌倉に戻ると、相繼いで浄智寺や瑞泉寺、円覚寺の住持となった。天皇崩御後、足利尊氏の招請により天龍寺の開山に迎えられた。ほかに、夢窓が創建した禅院には臨川寺や等持院、真如寺、西芳寺などがあつた。生前に夢窓国師・正覚国師・心宗国師の号を賜わり、示寂後、普濟国師・玄猷国師・仏統国師・大円国師の号を贈られて、七朝の帝師と称されている。夢窓の友人あるいは弟子に渡来した中国高僧や入元の日本の禅僧が多く見られ、たとえば、明極楚俊と友誼が厚

く、互いに詩偈を唱和しあつた。また、かなで著した『夢中問答』が刊行された時、竺仙梵僊が序を作つた。夢窓疎石はまた山水癖があり造園の大家でもあつて、その隠遁地である永保寺や吸江庵、泊船庵および瑞泉寺、西芳寺などの禪寺には造園の傑作がのこされている。前述した天龍寺十境の選定は、まさにその面の集大成ともいえよう。十境の選定を日本の禪院に普及させるにあたっては、中国文化あるいは文学の素養をもつた、このような日本の高僧も大きな役割を果たしたのである。

第三に、禪院の十境は「天造地設」のものではなく、禅僧の「当人之胸次」、すなわち胸中を表わすものであつたということである。夢窓疎石の偈に「境致元非淨穢殊、大人所在是靈区⁴⁹」とあつて、境致の選定に禅僧の果たす役割の重要性を強調している。天龍寺十境の「亀頂塔」は、寺裏の亀山の頂上に建てられた多層の塔であるが、夢窓はその偈に「戸牖恢開不蔵六、重重法界目前彰」と賦している。亀頂塔の四周を眺めると、「法界」が目の前に現れてくるというのである。これは夢窓のある種の胸中を表わしていると同時に、これが境致の選択にもつながるのである。夢窓は好んで寺の裏山の頂上の眺望の良いところに塔や亭を作っており、瑞泉寺の徧界一覽亭や西芳寺の縮遠亭などいづれもそうである。前述した禪院の十境の例からもわかるように、選者によって十境には建物が多く選ばれたり、あるいは自然の景物が多く取り入れられたりするようになっている。

恐らく禅僧各自の胸中が十境選定の際に働いたのであろう。

5 おわりに

以上、禪院の十境（あるいは八景）にあたえた「十詠」「十題」の詩・偈の影響や、「瀟湘八景」の影響、そして日本の禪院における十境の発達について、京五山・鎌倉五山を中心にして論じてきた。しかし、これら大禪院の塔頭でも十境の選定が行われている。たとえば、相国寺の塔頭である今是庵では十境（蘆花深処・水月亭・狎鷗檻・懶漁窩・浄友軒・有秋店・菜園・池上閑歩・香影齋・弁才天廟）が選ばれている。また、いわゆる林下の例では、大徳寺十境（達磨峰・瑞雲軒・看雲亭・金剛軒・古松岩・起竜軒・官池・梅橋・雲門庵・明月橋）、妙心寺十境（万歳山・拈華塔・度香橋・百花洞・宇多河・旧籍田・南華塔・齋宮社・鶏足嶺・高安灘）が挙げられる。

さらに、臨済宗だけでなく、曹洞宗の禪院にも十境が行われた。比較的早い時期のものには、普濟善救（一三四七〜一四〇八）の選定した加賀聖興寺の十境（三神廟・飯涌峰・瑞雲丘・活人溪・竜吟松・官路橋・明月江・靈亀島・石蓮塚・白鷺洲）、越前禅林寺の十境（蔵六山・白山廟・如意峰・医王嶺・講師谷・主道岩・甘露泉・安禅石・挂鞋榎・度香川）、それに松堂高盛（二四三〜一五〇五）の選んだ遠居高台山円通院の十境（臥竜松・白銀坂・清涼界・如意峰・梅花径・紫竹林・巨鼈峰・松蔭塔・清眼嶺・洗耳岩）がある。これらの十

境について、本稿では十分な考察ができなかったが、これらも十境の日本禅院における発達の一部をなすものと考えられる。よって、今後の研究課題として検討すべきことである。

注

- (1) 境致(きょうち)について、中村元ほか編『岩波仏教辞典』(岩波書店、一九八九年)には、「禅宗では寺内外の風致を特に重んじ、山・岩・川・池・建物・橋など、景観として重要なものを選んで十境じゅっきょうと呼び、詩にも詠まれている。十境は必ずしも寺内のものに限らず、たとえば『建仁十境』には五条大橋や、法観寺五重塔(京都市東山区、一四四〇)なども含めている」(同辞典一八〇頁)と解説がされている。
- ほかに、境致に関する主な論文としては、玉村竹二「禅院の境致——特に楼閣、廊橋について——」(『佛教藝術』第二六号、のちに同氏著『日本禅宗史論集』巻上所収。思文閣出版、一九七六年)や、関口欣也「中世五山伽藍の源流と展開」(同氏執筆『五山と禅院』所収。小学館、一九八三年)、同氏「中国江南の大禅院と宋五山」(『佛教藝術』第一四四号、毎日新聞社、一九八二年)などが挙げられる。私が東京大学に提出した学位論文『中世の禅院空間に関する研究——境致を中心として——』(一九九四年)も境致の研究を試みたものである。

(2) 上村觀光編『五山文学全集』思文閣出版、一九七三年復刻、一

九九二年再版、第一卷七三七〜七三八頁。

(3) 江戸中期の写本である『扶桑五山記』には、京五山や鎌倉五山における歴代住持・境致・塔頭・寮舎名および中国の五山・十刹・甲刹の開山や歴代住持・境致名、そして日本の十刹・諸山一覽、五山・十刹の位次変遷が記載されている。玉村竹二氏の考証によると、原本の成立は享保七、八年(一七二二、二三)とされる。拙稿は玉村竹二校訂『扶桑五山記』(臨川書店、一九八三年)による。

(4) 「宋」張津等纂修『乾道四明図経』『宋元方志叢刊』北京・中華書局、一九九〇年影印、第五冊四九二七〜四九二八頁。

(5) 明復法師主編『禅門逸書』初編 台北・明文書局、一九八〇年影印、第四冊一〇二頁。

(6) 前掲書第三冊一三五〜一三六頁。

(7) 陸振岳校點『呉郡志』江蘇古籍出版社、一九八六年、四九一頁。

(8) 中国の五山十刹制度の成立について、定説はないが、一説によれば、南宋に入ると、禅宗とくに臨濟宗が江南を中心に、その勢力を伸ばし全盛を極めた。その中で、朝廷や士大夫階級との接近を深め、中央集権的な官僚制度を盛んに禅林に移植し、禅林を官僚化した。当時の宰相、史弥遠(一一六四〜一二三三)が寧宗皇帝(在位一一九四〜一二二四)に奏上して設立したのがこの五山十刹制度であるという。もしこれが事実なら、史弥遠の在任期間は一二〇八から三三年までなので、寧宗皇帝の在位期間と合わせて考えると、五山十刹制度の成立は嘉定年間(一二〇八〜一二二四)と見ることができよう。

(9) 「十境」も、「十景」も当時禅僧の間では、同じ境致の意味で使

われていたと思われる。「天童十境」より時代は降るが、同じ内容の阿育王寺十境（舍利塔・湧現岩・七仏潭・大権洞・仏跡岩・仙書岩・妙喜泉・宸奎閣・金沙井・玉几峰）について、积自学が「次十境韻」、清源本が「次十景韻」とそれぞれ題した詩偈を作っている（「清」积碗荃撰『明州阿育王山統志』卷十二、「中国仏寺史志」台北・明文書局、一九八〇年影印）。

また、音韻から「境」と「景」を考えると、この二字の発音が同じであることがわかる。『漢語大詞典』（漢語大詞典編輯委員会、同編纂処編纂、上海・漢語大詞典出版社、一九八六（一九九四年）のそれぞれの項（第二卷一九九頁、第五卷七六九頁）には、つぎのように記されている。

境 [jǐng] 『広韻』居影切、上梗、見。]

景 1 [jǐng] 『広韻』居影切、上梗、見。]

景 2 [yǐng] 『集韻』於境切、上梗、影。]

そのうち、境と景 1 との発音は四声（四つの声調）の違いはあるものの、いずれも jǐng と発音され、境は第四声の jǐng で、景は第三声の jǐng である。いっぽう、この二字の日本語の発音は『大漢和辞典』（諸橋轍次著、大修館書店、一九八六年修訂版三刷）によると、境にケイ、キャウ（卷三、二五一七頁）と、景に（一）ケイ、キャウ、（二）エイ、ヤウ（卷五、五五三頁）とされる。境と景は中国語の発音のみならず、日本語のそれと同じであることになっている。

(10) 瀟湘八景図の中国での発生について、島田修二郎「宋迪と瀟湘八景」（『南畫鑑賞』十之四、のちに同氏著『中国絵画史研究』所収、中央公論美術出版、一九九三年）が詳しい。拙稿もそれに負う所が

大きい。

(11) 胡道静校証『夢溪筆談校証』上海古籍出版社、一九八七年、五四九頁。

(12) 『禪門逸書』初編第四冊九七〜九八頁。また、同書卷十五にも瀟湘八景の詩が載っている。

(13) 瀟湘八景図の日本への導入について、戸田禎佑「瀟湘八景と水墨山水屏風」（『日本屏風絵集成』2 所収、講談社、一九七八年）が詳しい。拙稿もそれに負う所が大きい。

(14) 『大日本佛教全書』財団法人鈴木学術財団、一九七〇〜七三年、第四十八卷「禪宗部」二二六頁。

(15) 朝倉尚著『禪林の文学』清文堂、一九八五年、三〜五八頁。

(16) 前掲書二九頁。

(17) 『鈍鉄集』『五山文学全集』第一卷三七四〜三七五頁。

(18) 『空華集』十三『五山文学全集』第二卷一七〇九頁。

(19) 辻善之助ほか校訂『空華日用工夫略集』太平洋社、一九三九年初版、一九四二年再版、二二九頁。

(20) 「南禅寺御成。……齋罷。南禅院御焼香并泉水。徐歩御覽。於国師塔御焼香。十境名数御覽也。……」（玉村竹二・勝野隆信補訂『蔭涼軒日録』臨川書店、一九七八年復刻、一九九一年再版、第一卷一七六頁）

(21) 搞保己一編・太田藤四郎補『統群書類従』第九輯下 統群書類従完成会、一九二五年初版、一九八一年訂正三版六刷、四九六〜五二三頁。

(22) 『夢窓正覚心宗普濟国師語録』『大正新修大藏経』第八〇卷「統

諸宗部十一」大正新修大藏經刊行会、一九九二年、四八一頁。

(23) 玉村竹二編『五山文学新集』東京大学出版会、一九六六〜八一年初版、一九九一年二刷、別巻二・八〇〜八一頁。

(24) 前掲書別巻一・五四五〜五四六頁。

(25) 長谷川端校注・訳『太平記』小学館、一九九四〜九八年、第三巻一六五頁。

(26) 「……当院御焼香。蓋八日御懈怠之謂也。山門十境名。書而獻之。十境名曰祝釐堂。護国廟。円通閣。功德池。大宝塔。洪恩音樓。天界橋。竜淵川。般若林。莊嚴域。天界橋。凶而懸御目」(蔭涼軒日録)第一巻一四六頁)

(27) 『禅居集』『五山文学全集』第一巻四六二〜四六三頁。

(28) 白石虎月編『東福寺誌』思文閣出版、一九七九年復刻、六八三頁。

(29) 塙保己一編『群書類従』第二十四輯 統群書類従完成会、一九二八年初版、一九六〇年訂正三版、二四一〜二四五頁。

(30) 『明極楚俊遺稿』『五山文学全集』第三巻二〇二九〜二〇三〇頁。

(31) 『乾峰和尚語録』『五山文学新集』別巻一・六三九〜六四一頁。

(32) 東京大学史料編纂所蔵写本(石井光雄旧蔵上村本)。目子とは人名や事物などの名前が多い場合、それらの名前を忘れないために記した紙片。『宗派目子』には、『扶桑五山記』に載っていない十刹や諸山の境致(あるいは十境)名が多数記載されている。

(33) たとえば、南禅寺山門上層の五鳳楼や外門の五山之上、天龍寺外門の天下竜門、相国寺外門の妙莊嚴域、建長寺山門上層の応真閣や東外門の海東法窟・西外門の天下禅林、円覚寺山門上層の法雲閣

浄智寺外門の宝所在近などが挙げられる。

(34) 『大日本佛教全書』第八十八巻二五六頁。

(35) 服部俊崖「径山寺考」(『佛教史學』一之九・七七頁)や、関口欣也「中国江南の大禅院と南宋五山」(『佛教藝術』第一四四号四七頁)を参照されたい。

(36) 横山秀哉著『禅の建築』彰国社、一九六七年、一五四頁。

(37) 前掲書一五五頁。

(38) 『蔭涼軒日録』第一巻一六七頁。

(39) 鎮守堂の祭神について、横山秀哉氏は「開山が特に尊崇した」神、「その寺域と関係の深い」神、「開山が中国へ渡って伝法将来の際に特異の靈験を感受した」神、「寺院開創に当り開山の徳に帰依して出現した」神と分類している(『禅の建築』二二三頁)。

(40) 径山寺の第五十五世住持、季潭禅師の「暁晴流止亭看岩下眠雲」には「亭際老僧来倚檻、只疑下界頓成空」という句が見える(『明』宋奎光輯『径山志』巻九、『中国仏寺史志』『径山志』八三〇頁)

(41) 「天封尺地許帰休。致遠鉤深得自由。到此人々眼皮綻。河沙風物我焉度」(『天龍開山夢窓正覚心宗普濟国師年譜』『統群書類従』統第九輯下五〇八頁)

(42) 「此峰旧属岩蔵寺。々亦亀山上皇檀度之地。竜湫和尚住山。買此一峰。為本寺主山。質以京中五条地。寄附岩蔵教寺。有司公驗契券在」(『天下南禅寺記』『群書類従』第二十四輯二二七〜二二八頁)

(43) 玉村竹二「五山叢林の塔頭に就て」(同氏著『日本禅宗史論集』巻上)や、横山秀哉著『禅の建築』、川上貢著『禅院の建築』(河原

書店、一九六八年）を参照されたい。

(44) 『蔭涼軒日録』文正元年（二四六六）閏二月十八日の条に、「上月六郎来話。忻藏主説桂方寺為山門境致又後人標手。而山門前溪辺栽嘉樹或美竹。其本根無恙。不亦幸乎」（『蔭涼軒日録』第二卷一〇九頁）とあり、山門の前に「嘉樹」や「美竹」が植えられていたことがわかる。また、同書の文明十八年（二四八六）の十一月廿二・廿四・廿六日の条（『蔭涼軒日録』第二卷三八八〜三九〇頁）には、相国寺塔頭の鹿苑院門前の植樹に関する記事が見える。

(45) 入矢義高訳注『臨濟録』（岩波文庫）岩波書店、一九八九年、一八五〜一八六頁。

(46) 注(29)、二四三〜二四四頁。

(47) 相国寺鹿苑院の塔主を掌る竺雲等連（二三八二〜一四七二）の序文は十境選定に批判的だったが、その「寺必当有十境耶」ということは逆に当時、すなわち十五世紀頃以降、十境の選定がすでに流行っていたことを物語っていると思われる。もともと十境の早期の事例として、「建長寺十境」「東山十境」「天龍寺十境」、そして「大慈寺十境」などをのぞけば、その他の十境の選定期は萬寿寺十境とあまり変わらない。

(48) 『濟北集』『五山文学全集』第一卷九八〜九九頁。

(49) 注(21)、五一頁。

(50) 今是庵十境は春溪洪曹（?）〜一四六五）によって選定されたものと考えられる。『蔭涼軒日録』寛正四年（一四六三）九月廿六日の条（『蔭涼軒日録』第一卷四二八頁）を参照されたい。また、瑞溪周鳳（一三九一〜一四七三）の手になる詩集『臥雲稿』には、

「次韻題今是庵壁」「和同庵十詠」（『五山文学新集』第五卷五七〇〜五七一頁）がある。

(51) 黒川道祐撰『雍州府志』『新修京都叢書』第十卷、臨川書店、一九六八年初版、一九七六年再版、六四四頁。

(52) 前掲書六五〇頁。また、無着道忠着『正法山誌』（思文閣出版、一九七五年、第八卷一七六頁）にも同寺十境が見える。

(53) (54) 『普濟禪師語録』卷之下、『曹洞宗全書』曹洞宗全書刊行会、一九七三年復刻、第五卷「語録二」一六二〜一六四頁。

(55) 『円通松堂禪師語録』卷第一、『曹洞宗全書』第五卷「語録一」、三九三〜三九六頁。